

紀伊國名所圖會

一之卷上  
和歌山部

ル 4  
1833  
1



目録  
1833  
1-17

うら婦を流はる兒を門へ

かき海より世は流るはちゆく風

ちるは海より世は流るはちゆく風

やうき山とあ代の勢は千は流る

時かき海より世は流るはちゆく風



風雅の好士多し  
紀伊府青霞堂志友とるん  
かまうし紀州若所圖會  
あまうし法橋中祖と  
國中のあまうし

いふふと行ふ  
封城の廣き名區佳境の  
一帯にほ  
名山和舟の  
か田浦根来より

日高徳師高師のまはるは編

あゝまゝにうらんはゆゑに世にまゐる

あまのまはるにゆゑに眼涯は

まゝにまゐるにゆゑに

まゝにまゐるにゆゑに

まゝにまゐるにゆゑに

まゝにまゐるにゆゑに

まゝにまゐるにゆゑに

まゝにまゐるにゆゑに

早朝をゆゑに識者のまは

中門注のしんしん

文化六年三月

右権中納言持豊

凡例

此書専ら二國一覽に便あらんを擬り然りとの其國界封域の廣大なる區佳境の繁多なる一舉一動盡く其の初篇に先名草海士の二郡ねよひ那賀郡の内貴志川の西を限り根來山までとせり行々の遺細に於て是と載るるも巡路の歴と眼涯の及際と叢祠茅舎とをも遺脱する事あることあり且往々草郡あり一區のち海士に屬せりありて地の廣狹均しむらば其のあつた郡兩卷に亘るものあり其初に界圖とせり大牙縁界とすもたのぼる目下に瞭然たり

神社の都々延喜式神名帳と奉とすは上より歴然たるもさうにも言はれぬ盛なり後表へるも必り是と審らばにばんあつた況や當國の神代の遺跡多く國乘に載るる往々ありありと中葉以後牧と發は灰燼し多と

埋没して地をざら考へつゝるもの多し其の山の名水の名田園  
の称呼或は里老の碑までも文へて悉く思考とおし後人の  
搜索に便せんや正史を必く証せり且御里を勧請する  
ところの神祠とあるも一村の生土神とするもの其由来を  
四本よの祭祀あるに至るまでくわしく是を載れ  
大社と称するもの大なる神代のむしりより建つるより又大  
度の寺院のごとく動じり千有餘年の星霜を経るもの  
ありし其物もあま衰へて或は回縁に羅て荒れし  
騷亂より移るに沿革あると不社なるより著し  
圖にめぐり當今の景勝とありしを以て寫す  
地に廣狭ありて紙に大小あり故に地廣大なるもの其形に隨  
て細密ありしをめぐり圖毎に人物の出入りする形の大小  
小にちり其廣狭と想へ

一 圖中間に人物の太圖とありし其地は關係る怪談奇話佛説  
おのほく古書にみえんと交りて兒童の女神と慰やんがたり  
此拳や自ら經歷して履跡の及び大槩先物の紀行とて考  
考へ更に校訂を加へ諸書及び證は其田跡名勝古今移  
するがごに必研究せしむ置たをめぐり書に日本紀と類  
凡国典に載るべき曲の終する所の野史碑官とて考  
漁獵して山溪谷をめぐりて採集詩賦の名を  
文集其條の連款俳諧歌の類を以て其先人の集中  
より抄出さるるは神祠佛刹の起るに社司寺僧の記す  
所まじりて其先人の傳る所を以て其先人の採集を  
り其考證して其俗を以て其怪れり愚昧を以て  
ごとの勇て其を以て其を以て其を以て其を以て其を以て  
其佛像の像中に出るは其を以て其を以て其を以て其を以て

紀伊國名所圖會卷之一目錄

國号之事

三神木種と布之圖 郡分之事

國君興敗之事

國産之事

名草郡之部

和歌山

男水門

片岡の里

刺田比古神社

八幡宮  
天満宮  
春日神

末社  
稻荷神  
神樂舎

弁財天

松生院

藤井宮

珊瑚寺

大井泉

廣次池田

圓津輪坂

禪林寺

原見坂

感應寺

延命院

本久寺

普門寺

塩道村

首架の里

菊本橋

空名松

男方嵐徳養

名産麻地酒

岡東離宮

念誓寺

杉本橋

大橋

勅使橋

藤六町

庚申堂

般若院

久成寺

多門院

代神樂

五官小治

大立寺

郭公堂

感應寺かんとくじ

兼源院かねげんいん

林泉寺りんせんじ

萬物院ばんぶついん

崇徳寺すんたけじ

天王の夷てんわうのひら

徳勳津とくくんつ

中野の宮なかののみや

明見寺めいけんじ

千手院せんじゆいん

傘師かさぢ

照え院てりえいん

納良瀬のらうせ

中材木西なかまきにし

向人ヶ坪むかうりかへら

けの碑けのいし

金毘羅權現きんぴらごんげん

八幡宮やっぴんぐう

圓津津まづつ

溜地るいぢ

大空おほぞら

安樂寺あんらくじ

観音寺くわんおんじ

三郎明神さんらうめいじん

牛糞寺うしんじ

乃任のり

体質たいしつ

新源しんげん

伊佐いさ

志摩しま

核田かくた

古堤ふるつゑ

丸の辻まるのつじ

入願いりがん

後のち

夕ゆふ

柳の井やなぎのい

宣のり

真光まっこう

法蓮ほつれん

園のち

兵へい

傾城けいじやう

阿弥あみ

法隆ほつりゆう

養やう

水牛みづうし

三さん

石橋いしはし

住吉神社すまぎじんじゃ

前まへ

百ひゃく

雑ざつ

魚市うし

雄おとこ

雄おとこ

雄おとこ

雄おとこ

雄おとこ

雄おとこ

高たか

利益りやく

的てき

踏ふみ

息いき

奉ほう

奉ほう

奉ほう

奉ほう

奉ほう



紀伊國名所圖會卷之壹之上

國号之事

當國の日本國の神代のむす素戔鳴尊の子五十猛命妹  
を大屋津姫命と云ふ机津姫命と号奉る凡世三神は本國を分布する

あつが當國の渡坐る本より國の邊に當國の鎮座する

以上日本神代卷にるる○五十猛命は大屋比古神との名草郡山東莊伊太祁曾村にあり  
伊太祁曾神は是より大屋津姫神社同郡平田莊宇田あり都麻津比賣神社同郡吉村  
村あり極その二柱神を大屋比古と大屋比賣とを機津比賣と号奉る其の用是屋舎に  
造るに主し大屋比古と大屋比賣とを名取たり其の用は極の用は是屋舎に  
造るに主し大屋比古と大屋比賣とを名取たり其の用は極の用は是屋舎に

其後代より元明天皇の御制に因て此の音の韻の伊を添へ定ちしり

和同六年の詔に畿内七道諸國の郡名着好字と云ふに民部  
式に凡諸國郡内郡里等名並に用二字必取嘉名と云ふに

城垣爾不止將往來妻社妻依來西根妻常言長柄 坂上忌寸人

日 玉匣閑卷惜怪夜矣袖丁禮而一鴨將寐 柿本入磨







曆十九年四月三日國ノ崑崙ノ綿實より漂着して其種と云ふ  
 六國ノ校しは是日日本に棉ありとあり中右より其種と云ふ  
 文様年中のては其種と云ふ普く天下にまがらうこと  
 まの綿の日本ははらりといは國と始ては秋より本  
 名を負く大凡地は生る所の本種は國より良あり榿楠  
 櫟樟のたぐいといふは穀とては好むの棉とよりと  
 といふ紅女紡織の業日夜よりまら毛綿總多は諸國  
 物とて天下にまがらう  
 ○諸書にえらる品類 ○毛綿 ○總糸 ○蜜柑 ○金柑 ○花 ○乳  
 柑 ○青皮 ○陳皮 ○紫蘇 ○枳殼 ○山査子 ○黃連 ○肉桂  
 ○根皮 ○桂心 ○麥門冬 ○石川 ○小人參 ○疾毒木子 ○荊芥  
 ○小茴香 ○蟬退 ○蜂窩 ○日香 ○蜜蠟 ○樟腦 ○槻 ○榿 ○樟  
 板 ○樞木 ○椎木 ○杉新 ○首籠藤 ○苧竹 ○椿木 ○然燈

炭 田辺 ○松 半妻功 ○大平墨 ○藤白墨 ○岩草 高  
 南郊 ○松煙 日高功 ○大平墨 ○藤白墨 ○岩草 高  
 ○芸揚子 ○土砂 ○刻菜 ○傘紙 ○盆石 古屋谷や上  
 ○根來杭 ○淡地杭 ○折敷 ○檜笠 ○杉杖 ○柝蓋 田辺  
 紙子 弁 ○火舟 新 ○弓 雅實 ○孫六袋 色屋 ○紋羽織 ○松葉  
 傘 若 ○忍冬酒 色 ○麻地酒 廣 ○庭石 大崎 毛見 ○温石 白  
 山 藍 小忌衣とほり 谷津子 色 ○碁石 淡 ○地黒石 浦 ○金  
 付石 ○菊名石 ○蘭 古今馬 ○中菊 上 ○奥津鯛 ○鱧 ○鱧  
 鱈 鱈令 ○鱈 鱈 ○鱈 鱈 ○鮭 鱈 ○鮭 鱈 ○鮭 鱈 ○鮭 鱈  
 古丹 鱈 ○三骨 鱈 ○魚油 ○鱈鱗魚 ○鱈鱗魚 ○鱈鱗魚  
 三幅 鱈 ○鳥貝 鱈 ○大蛤 串 ○馬刀 ○鳥帽子貝 白 蛸 玉津  
 地 蛇貝 長 ○鳥貝 ○海鰻 本 ○海雲 律 ○かた布 ○茶  
 糸 湯 ○海苔 妹背 ○鹿尾菜 ○荒布 色 ○布 色 ○石  
 菜 ○梅苔 三冬 ○釣冠菜 ○貝細 田 ○砥石 俣 石 俣 石  
 俣 石 俣 石 俣 石 俣 石 俣 石 俣 石 俣 石 俣 石 俣 石 俣 石

珊瑚樹 根を備 玉鏡臺 備王 石灰 〇 石灰 〇 石灰 〇 石灰 〇 石灰 〇

〇 汗綱葉 〇 本藥草 〇 早蕨 〇 砂糖 〇 湯洗 〇 湯洗 〇 湯洗 〇 湯洗 〇 湯洗 〇

〇 鯉 〇 鮎 〇 塩 〇 麥粉 〇 西瓜 〇 土素 〇 土素 〇 土素 〇 土素 〇 土素 〇

〇 瓜 〇 白箸 〇 揚梅 〇 香湯 〇 水餅 〇 粉川 〇 粉川 〇 粉川 〇 粉川 〇 粉川 〇

〇 物 〇 佛 〇 陶 〇 名草 〇 水豆腐 〇 烟叶 〇 烟叶 〇 烟叶 〇 烟叶 〇 烟叶 〇

二〇 麵 〇 鮎 〇 雀 〇 鮎 〇 鮎 〇 鮎 〇 鮎 〇 鮎 〇 鮎 〇 鮎 〇 鮎 〇

江南歌 十首之一

低南洋

紡車操罷理 餐雲街上 踏歌夜紛紛 昨日東家  
携小女 誇人新製水綿裙

名草那

〇 名草那 〇 名草那 〇 名草那 〇 名草那 〇 名草那 〇 名草那 〇 名草那 〇 名草那 〇 名草那 〇 名草那 〇

私致

〇 此地上古の府城の西を流る麓まで於て海濱となりしと  
名を人々上古神武天皇此地より幸まらるるに海中より  
吹出たる地を正名として吹出の里と名付たる其後西南の  
方漸く陸地となりて濱より遙くをりゆくに竹の影法師  
だまてむししの面目を改吹出の里の名もせんくの終より  
うゝ弱ふりよよいともやり  
くつ弱ふりよよいともやり



神武皇帝  
名舟戸群を  
何たる人





疾いとして甚くそけきむ五瀬命檢劍くらたまして慨哉  
 大友の虜が子と傷く報ひとしくむらんやのうて雄詰  
 くらぬい終る崩さるしより時人けきと男火門の臣とを  
ひ日本書紀卷第九の古事記に云く  
天武天皇の御代に大友皇子を討つて

美都美都斯久米能古良賀加岐母登爾宇惠志波加  
 美久知比久和礼波和須礼士宇知互斯夜麻牟

美都美都斯久米能古良賀加岐母登爾宇惠志波加  
 美久知比久和礼波和須礼士宇知互斯夜麻牟  
美都美都斯久米能古良賀加岐母登爾宇惠志波加  
 美久知比久和礼波和須礼士宇知互斯夜麻牟  
美都美都斯久米能古良賀加岐母登爾宇惠志波加  
 美久知比久和礼波和須礼士宇知互斯夜麻牟

行岡の里

行岡の里 武大皇神龜元年十月辛卯  
 此池に注日大伴部押人出し所たり續日本紀云高野天皇  
初位上勲七等大伴部押人言傳聞押人等本是紀伊國久  
 草郡行岡里人也云

刺田比古神社

刺田比古神社 岡谷の宮あり世俗岡の宮とて稱す  
 紀伊神 諸説紛々として定まらず  
 延喜式神名帳に云く刺田比古神社本國神名帳に云く四位上刺田彦神社  
 攝社八幡宮 本社の西ありけり神名帳に云く廣徳川  
 末社 稲荷神社 奉祀王女 神樂舎 奉祀八咫  
 女入道はなして唯岡の宮と稱す。この岡の宮はありて  
 志も岡所の生々社とまきしる也。

開のりまで。里老性性にして。あはと刺田比古神社と号する  
と瓜信いごりのあまをいひて。旧記は縁を考ふる。續日本紀  
に聖武天皇神龜元年。冬十月辛卯。天皇幸紀伊國。造  
造離宮於田東。皇賜造離宮司及紀伊國國司郡司。仍  
宮の側近。高年七十以上。祿各有差。百姓今年。細庸。名州。以  
部二郡。田租咸免之。とある。其岡東の地とある。是  
則この名の谷をいひ。離宮の地あり。人あり。いかにこゝを  
と衣。祿を賜ひ。田租免物。す。亦其恩と云れん  
が。あま。或は初瓜。建々んと。預く。田の定く。も。称し。本  
いもあ。ぐ。ま。る。を。皇。霜。後。あ。て。り。御。願。度。か。る。み。敷  
度。の。兵。死。は。社。頭。も。む。を。り。果。く。唯。文。化。と。い。ふ。の。も  
ど。の。し。あ。ん。を。其。後。廣。願。所。よ。う。ま。り。九。頭。大。明。神。の。初。を  
授。り。を。り。この。何。の。神。と。あ。ま。る。と。知。る。が。た。も。其。九。頭

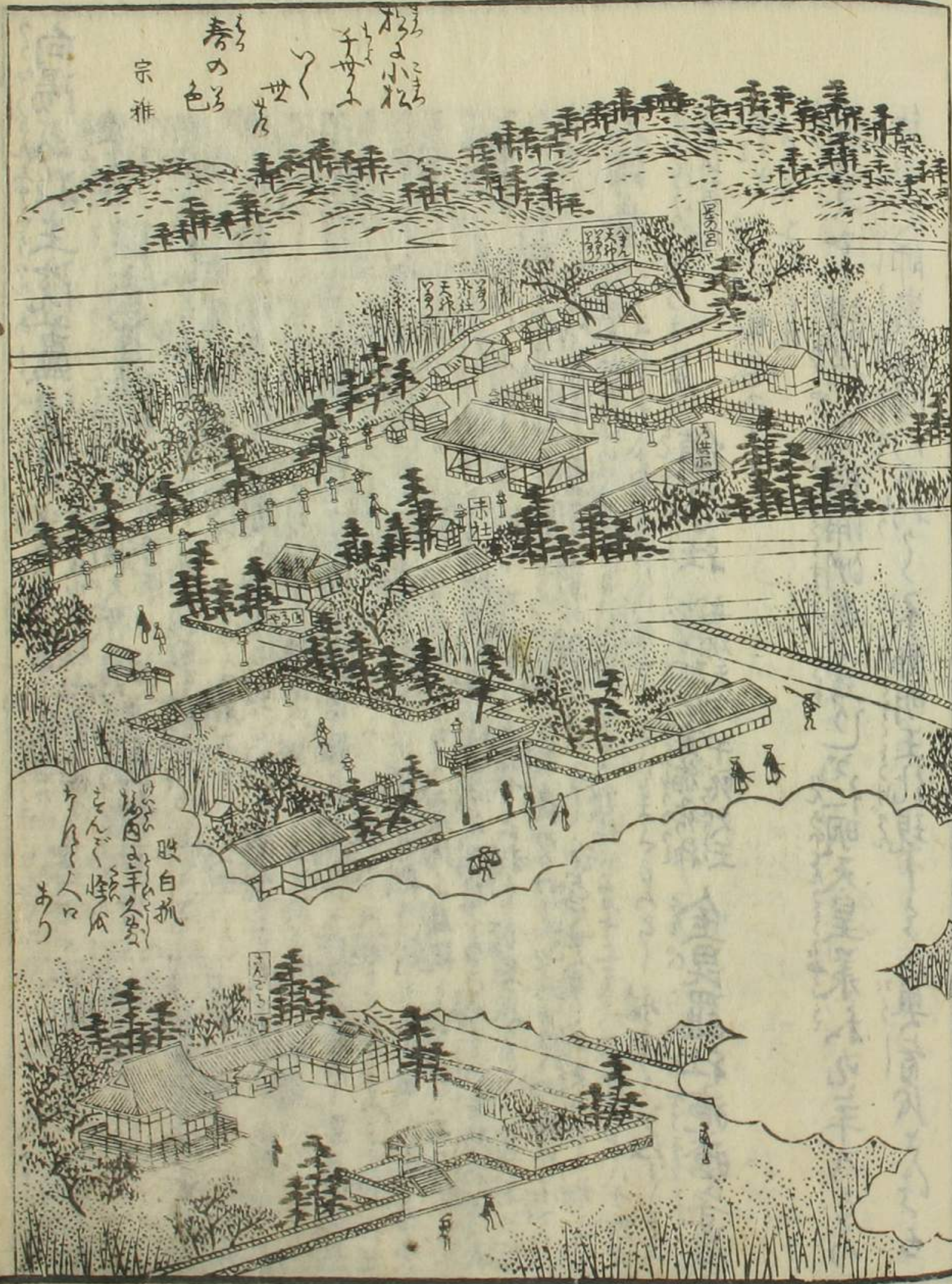
と。廣。願。所。の。郭。外。に。國。津。輪。と。り。里。あ。り。て。今。も。あ。は。は  
と。て。其。里。の。中。に。林。と。い。ひ。將。と。ま。ふ。よ。り。ま。り。を。安。年。中  
國。祖。君。より。壽。附。り。た。ま。ふ。石。燈。籠。に。も。九。頭。大。明。神。社  
と。記。さ。し。め。あ。り。又。此。御。松。生。後。の。寺。記。に。も。安。文。の。と。り。ま。を  
あ。は。の。別。當。殿。あ。り。別。あ。る。と。り。九。頭。大。明。神。と。い。ひ。と  
其。後。の。神。安。惟。神。送。と。り。と。稱。し。て。別。名。と。除。と。神。号。と。も  
あ。ら。た。め。刺。田。比。古。神。社。又。國。を。神。社。と。も。あ。る。よ。り。と。え。ら。る。  
皇。國。訓。の。甚。し。き。也。と。い。ひ。皇。國。の。神。官。なる。の。唯。漢。字。の。心。を。以。て  
口。と。い。ふ。の。あ。る。よ。り。馬。と。其。名。祖。と。國。を。神。と。い。ひ。神。の。名。を。た。し。し。る。と。い  
國。の。神。或。は。大。國。の。神。と。い。ふ。と。あ。ら。る。よ。り。は。國。主。の。二。字。と  
政。受。も。訓。ら。る。よ。り。と。い。ふ。佐。豆。彦。が。後。裔。の。こゝに。采。邑。す。る  
ものと。政。受。神。と。稱。し。た。り。附。舍。り。の。國。を。政。と。い。ふ。

訓はらり。主命受らるるもの異事あり。訓と考とを合せ訓と  
俗人とも湯桶訓とく口をうとまうしてつくした神の所名も  
いんやのりうり九次と改受の假名も遠くをぬかざる  
刺田比古神社の式の神名帳も見えて久しく修る社号なり  
ふり下り其を神氏洋の口をぬかざる説きと區あり。近來  
屋太人の古事記傳考の十の大屋毘古神の此の氏名も多し。名草  
郡の刺田比古神社の刺田大神の由をたれり。や田の字の國の字  
の誤りありや。とうとう。此説最とあり。刺田大神の別  
大己貴命乃い五十猛命。大屋津姫命。机津姫命。母津  
刺田若比賣の父神をいふこの神もくわい祖父神なり。  
此國はまづまらゆんも理なきを。まご彼大己貴命が縮羽の  
八上比賣の婿たす。兄の八十神も一戸滅まひ。一  
其祖神といふ本國の大己貴古神五十猛命の所行も道遣給

とあり大國主神大己貴命の比國のまづまらゆんといふこと  
もあづり。勢東の孫神社のまづまらゆんといふ國主神に改受  
とる記訓のり。たすまらゆんといふはたす。その大己貴命の  
これして刺田彦もあづまらゆんといふことあり。あつと  
まづも字竟いふことあり。あつとまらゆんといふ國の字は甚も  
たす。たすも名をまらゆんといふ神の神なり。たす  
あつとまらゆんといふまらゆんといふ神あり。其刺田比古  
神社とまらゆん刺田大神を誤るあり。たすまらゆんといふ  
たすまらゆんといふ事あり。たすまらゆんといふ事あり。近世  
右廟の御時清生大神もまらゆんといふ事あり。法修を寄たまひ法崇  
敬他も異なり。神威四方にやた歳時のたす。たすといふ事あり  
この宮人なるは法修もたすのたすといふ袖とほねなり  
花垣やまらゆんもたすなり。八重さつ

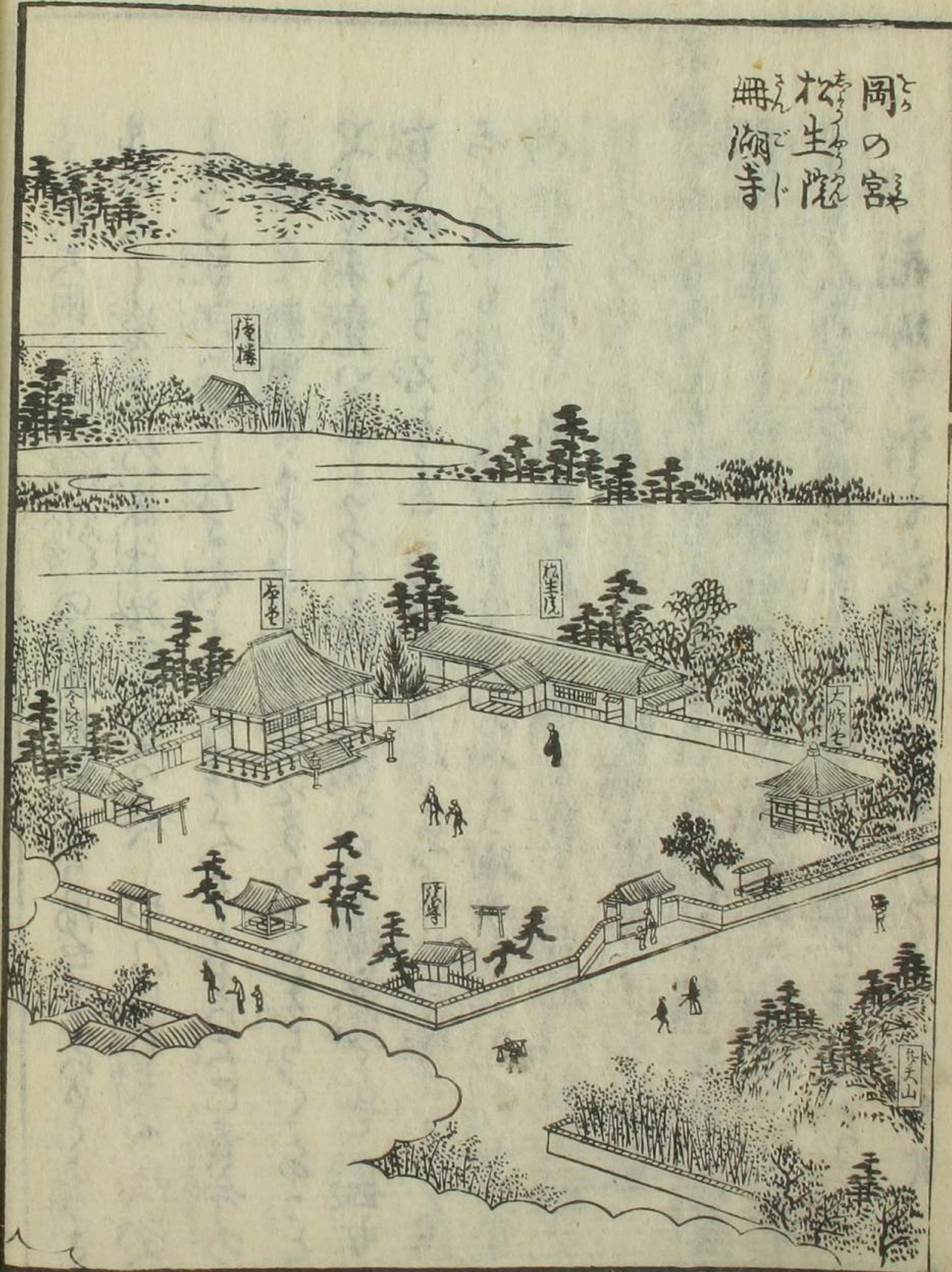
鬼貫

宗非  
春の色  
世々  
千代  
松



敗白狐  
西の山  
寺の  
あり

岡の宮  
松生院  
無湖寺



向陽山生院蘆辺寺

古の言ふ言ふ 本寺不動明王 尺五寸尊

服士高深の文

同十面觀世音

此寺は瓜母の南宮の不動と稱し... 鎮守社 金毘羅社 庵倉守護 神社

たまひくく大師造の波りたあは長く恩徳と報んぬ... 自二解のる像と彫刻ある是を本寺に安んずるところの靈像也... 大内徳と興く本寺也盛造之を...

なるいふやうに... 乾元元年...  
乾元元年... 僧...  
乾元元年... 僧...  
乾元元年... 僧...

秋八月... 堂... 僧...  
秋八月... 堂... 僧...  
秋八月... 堂... 僧...

伊予... 堂... 僧...  
伊予... 堂... 僧...  
伊予... 堂... 僧...

伊予... 堂... 僧...  
伊予... 堂... 僧...  
伊予... 堂... 僧...

伊予... 堂... 僧...  
伊予... 堂... 僧...  
伊予... 堂... 僧...

伊予... 堂... 僧...  
伊予... 堂... 僧...  
伊予... 堂... 僧...

伊予... 堂... 僧...  
伊予... 堂... 僧...  
伊予... 堂... 僧...

伊予... 堂... 僧...  
伊予... 堂... 僧...  
伊予... 堂... 僧...

藤井の宮唐跡

藤井の宮唐跡... 藤井の宮唐跡...  
藤井の宮唐跡... 藤井の宮唐跡...  
藤井の宮唐跡... 藤井の宮唐跡...

次信換棺之麻戸寺金

次信換棺之麻戸寺金... 次信換棺之麻戸寺金...  
次信換棺之麻戸寺金... 次信換棺之麻戸寺金...  
次信換棺之麻戸寺金... 次信換棺之麻戸寺金...

藤井の宮唐跡

藤井の宮唐跡... 藤井の宮唐跡...  
藤井の宮唐跡... 藤井の宮唐跡...  
藤井の宮唐跡... 藤井の宮唐跡...

藤井の宮唐跡

藤井の宮唐跡... 藤井の宮唐跡...  
藤井の宮唐跡... 藤井の宮唐跡...  
藤井の宮唐跡... 藤井の宮唐跡...

藤井の宮唐跡

藤井の宮唐跡... 藤井の宮唐跡...  
藤井の宮唐跡... 藤井の宮唐跡...  
藤井の宮唐跡... 藤井の宮唐跡...









源長が女にのほろけしけりしに... 細川公の御前... 四月十六日横山島... 四月十五日横山島... 由良の奥御寺に... 陪遊大智寺賦侍仙人... 中洲

陪遊大智寺賦侍仙人... 中洲

谷口烟霞歲月深 洞門何處好 函尋白雲尚憶

羽衣多滿容 松濤作鳳吟

常任之感應寺

南見南にあり法華宗

本堂

圓祖

南龍公の御遺骨を奉りて南の東照神君を祀りて號す

高祖日蓮大士の金骨寶塔

號す

鎮守七面

の神祠

南にあり

二十番神祠

東のふみあり圓祖

經藏

鐘樓

西の山にあり

師の作

本地院殿寢廟

位牌堂

本堂に立像の釈迦佛の懸心傍都

子院九區

去林院

夫當山原古刹

該別當嶽のふり

是心院

密宗の蘭若

文法のころ高祖日蓮大菩薩甲列身

延山は德棲

たまたま物々彼龍泉寺は女人の龍象あり

高祖の宗凡

一時の祖の幽栖なり

水の流るる

言下れ煥然たり

衣を更めて

終ははれし

往來甲たる

もの日々延歳に参りて教は公禀く

心ありて

頻はる祖を屈請はるる

則龍泉寺

改宗の始祖なり

類廢れ

むびり

妙法を

信じて亡父のころ

則延歳

の日朝する者

むら古れ

と稱するもの易に

後を廢壞

なむ

を以て

奮趾より

れを

ついでに

七父

の法諱と

て号と

して



感應院とありて実者の師の則き若き瓜兼より未づくも  
あづけりも勢は日宗上人の附せし日宗上人より一  
十一世日長上人のたよ至りて檀徒横田内膳政村より共  
其主に從く伯別と稱する今に政村の孫日長上人瓜  
子孫よりて甚しき伯別にわぬ新の移舎と宮  
と同じく是とも感應院と号し上人瓜招誘することか  
上人則日長は日陽上人の附屬し自ら伯別に遷らるるふ  
えね五年困頓 南龍公沖入園あるを上人の唱年序も  
日陽上人令あつて瓜は園を遷りてあつて瓜は  
瓜をよほりての困頓より瓜は園を遷りてあつて瓜は  
三寺瓜めりて瓜は園を遷りてあつて瓜は園を遷りてあつて瓜は  
河月にありて其想年二月  
養球太夫人自今の地瓜トて再い瓜は園を遷りてあつて瓜は

人の中法津より山と養心と号すりとも後まて田号  
に後より

遍照の延命院普賢寺

本号大日如来

脱士楽師如来を親世音

大原堂

遍照の延命院普賢寺 日村天照よりあり其言  
根元は延命院にありて  
本号大日如来 七二尺七寸 脱士楽師如来を親世音 長一尺八寸  
大原堂 四尺八寸 長二尺八寸 延命院にありて  
遍照の延命院普賢寺 日村天照よりあり其言  
根元は延命院にありて  
本号大日如来 七二尺七寸 脱士楽師如来を親世音 長一尺八寸  
大原堂 四尺八寸 長二尺八寸 延命院にありて  
遍照の延命院普賢寺 日村天照よりあり其言  
根元は延命院にありて  
本号大日如来 七二尺七寸 脱士楽師如来を親世音 長一尺八寸  
大原堂 四尺八寸 長二尺八寸 延命院にありて

此の寺は... 後内... 長三尺八寸の  
 像... 剛... 舎... 寺...  
**万部六千久寺**  
 日村の山あり... 鬼子母神  
 世傳... 神...  
**照檀妙見菩薩**  
 享... 二月十六日... 妙見...

當寺の... 津田... 本尊十一面觀世音菩薩  
 作不知  
**大原半**  
 弘法大原の... 四圍八十八ヶ所...

**塩道村**  
 此地... 塩と焼... 畑... 塩竈の...

の... あり... 瀨長... 枝...

**葛葉の里**  
 或... 津... 日村... 小... 曲...

**菊平の橋**  
 橋... あり... 橋...



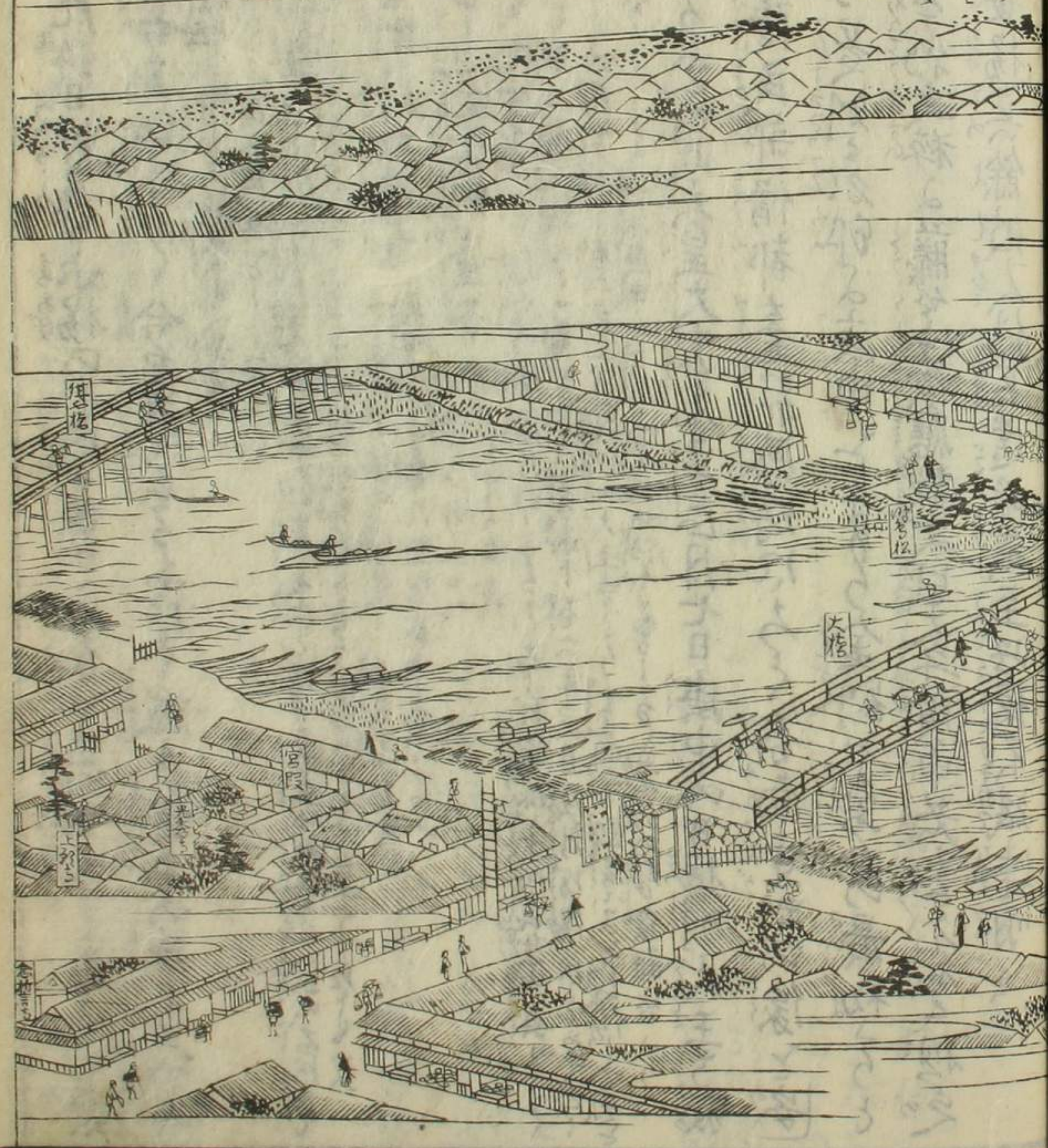
四方... 雪... 菊... 橋... 塩...





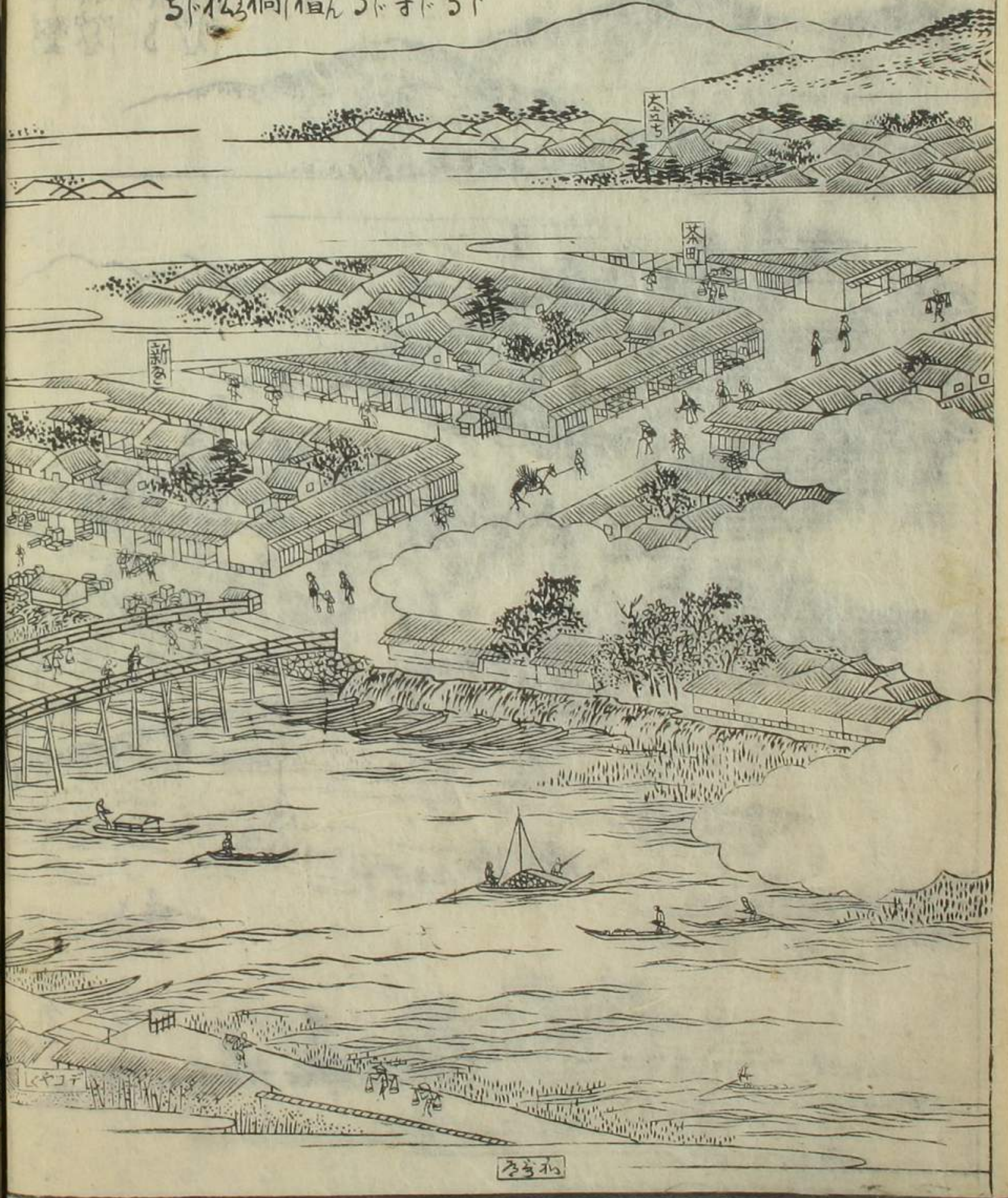
江邊  
ト水

秋真  
一夜西風滿樹  
秋。臥牀無夢思  
悠悠。早江水冷  
與應美。好傍蘆  
花。漫釣舟。  
田省



二其

大橋  
時分松  
大橋  
宮の檀  
上野寺  
念存寺  
念存寺  
念存寺





かどん終日仲成が水揚のいふありとましく其嘔啞とあこも樂  
戸の音方ひくく令色養とるふに誠と誓志の地とて

勅使橋

橋向い町より藤豊町へ架かる

藤六所

藤六所は藤六の所也藤六は藤六の所也藤六は藤六の所也

善見山金剛院切法寺

善見山金剛院切法寺は善見山の所也善見山は善見山の所也

奉子も回金剛童子

奉子も回金剛童子は奉子の所也奉子は奉子の所也

正善院民部僧都毫範感得のらくと青面金剛の像と  
まつる是別家印の唐申とまのり金剛とまのり最初と  
そ又奉子文稱の藤六の成應教文曰夫等唐申若くは元を祖之  
微言世揚其餘は人傳其遺跡或至此夜不眠達明と

碎さるる人の顔ちり山と

涼帝

永久の覚林寺寂美院

永久の覚林寺寂美院は永久の所也永久は永久の所也

奉子も薬師佛

祖師堂役の者

祖師堂役の者は祖師堂の所也祖師堂は祖師堂の所也

寶珠山久成寺

寶珠山久成寺は寶珠山の所也寶珠山は寶珠山の所也

松尾山門院大山寺

松尾山門院大山寺は松尾山の所也松尾山は松尾山の所也

奉子も薬師佛

奉子も薬師佛は奉子の所也奉子は奉子の所也

代神樂

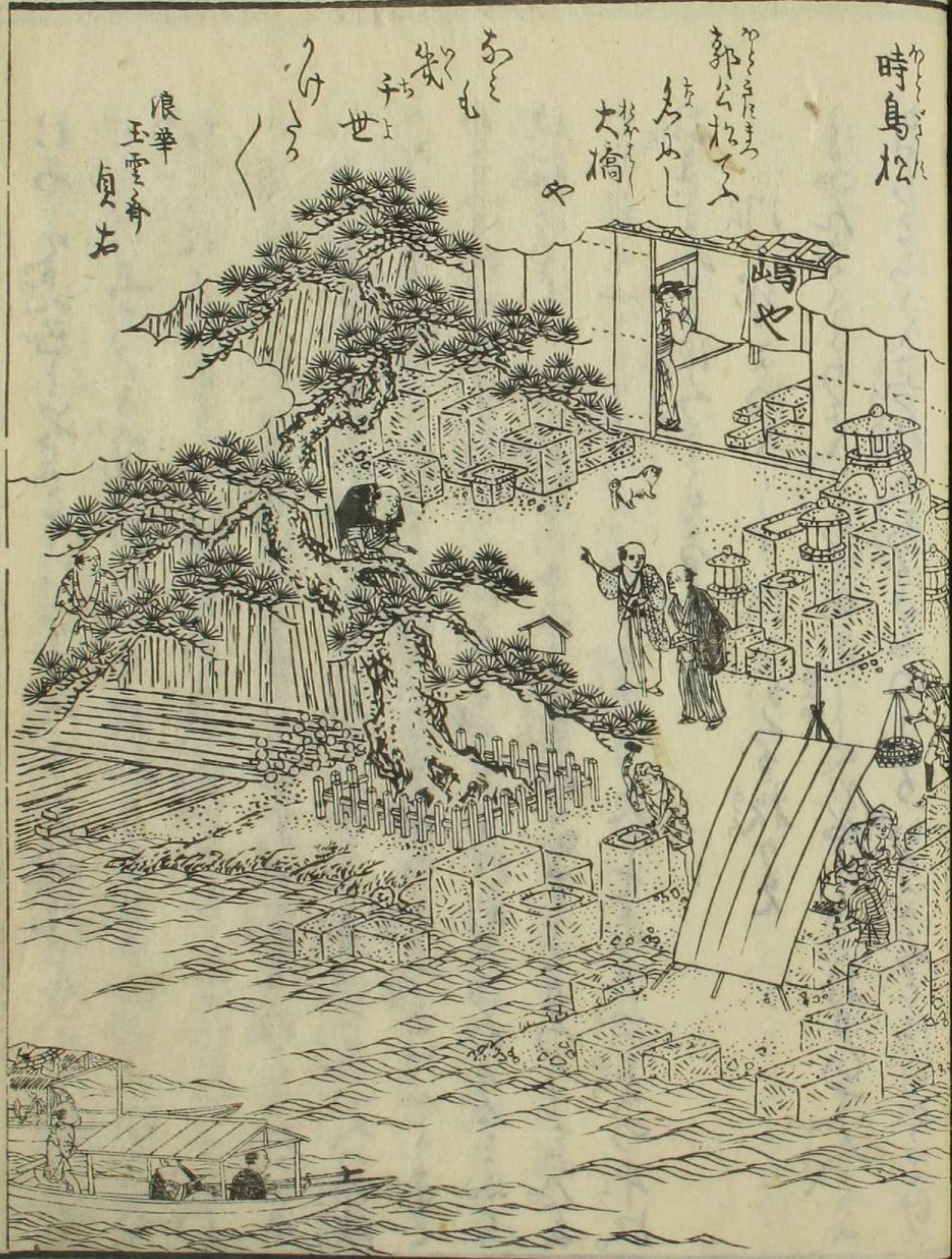
代神樂は代神樂の所也代神樂は代神樂の所也

吳五官小路

吳五官小路は吳五官の所也吳五官は吳五官の所也

廣瀬山無辺院大立寺

廣瀬山無辺院大立寺は廣瀬山の所也廣瀬山は廣瀬山の所也



浪華 玉聖寺 貞右  
 時鳥松  
 郭公ねえ  
 大橋  
 朱も  
 子世

親考也 奉養のありあり奉養の親世を慮けり  
 郭公松 大橋の東詰りあり  
 郭公松の記 土屋氏の記  
 女屋安足  
 公は... 井... 母... 家... 其の...  
 其のらけは... 其のらけは...



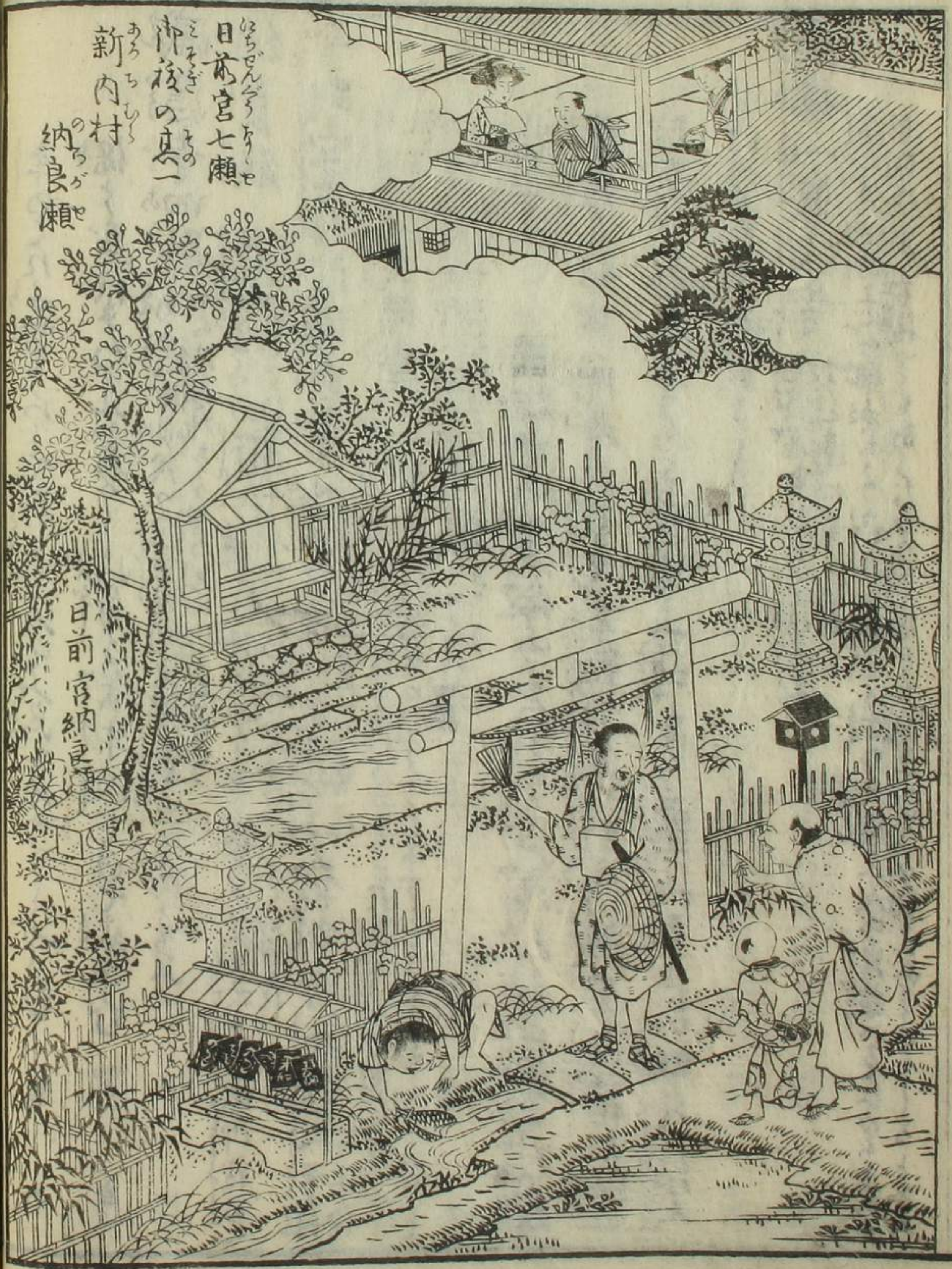


戸 年毎にこころをほくけ着れりすそこころ人根くえ 栄 忠  
 志 霜のなまよもかりたうて世のしつとほそ根ぞ本らた 道 切  
 奈 ちやうらのまよもほかりたうて世のしつとほそ根ぞ本らた 幸 孝  
 平 百千うらふまよもほかりたうて世のしつとほそ根ぞ本らた 尚 盛  
 加 川ものまよもほかりたうて世のしつとほそ根ぞ本らた 素 挺  
 久 今やまよもほかりたうて世のしつとほそ根ぞ本らた 幸 孝  
 乃 今やまよもほかりたうて世のしつとほそ根ぞ本らた 正 川  
 律 今やまよもほかりたうて世のしつとほそ根ぞ本らた 好 完  
 加 今やまよもほかりたうて世のしつとほそ根ぞ本らた 隨 尊  
 衣 今やまよもほかりたうて世のしつとほそ根ぞ本らた 春 葉

年毎にこころをほくけ着れりすそこころ人根くえ

感 應 寺 旧 趾 山崎町西の東屋町と云う感應寺町も云  
 納 良 願 山崎町西の東屋町と云う感應寺町も云  
 金 剛 山 常 任 院 遍 照 寺 山崎町西の東屋町と云う感應寺町も云  
 大 師 堂 山崎町西の東屋町と云う感應寺町も云  
 當 寺 山崎町西の東屋町と云う感應寺町も云  
 盛 坊 山崎町西の東屋町と云う感應寺町も云  
 乃 又 山崎町西の東屋町と云う感應寺町も云  
 洪 福 山 宣 後 寺 山崎町西の東屋町と云う感應寺町も云  
 自 依 院 山崎町西の東屋町と云う感應寺町も云

年毎にこころをほくけ着れりすそこころ人根くえ



日新宮七瀬  
仲後の真一  
新内村  
納良瀬

日新宮納良瀬

りして初発のむしりうろ志気たつていふもふくむやあはれはるのめりけとんがた  
いのちとちひうつとと顧たなりり或付僧をやたさく火とらるをほしこい瓜頂に被  
けり人よはれん圓のまぢりやあやも焼爛うとあしやこんううて世に  
濁うその異号に梅でう終る長享二年九月十七日寂とふしたまは法腊八十有つと  
つ又上人自筆の曼荼羅とてあり

東光寺栗原院薬師寺  
本尊の茶作佛

師林本町  
上人は得して己が修む所並に火災をうるといふをいふに上つて瓜頂に被りて  
本の人とりて己の修む所並に火災をうるといふをいふに上つて瓜頂に被りて

光明寺法泉院真光寺  
本尊の阿弥陀佛

体かみ  
光明寺法泉院真光寺  
本尊の阿弥陀佛  
白院の初泉川日根郡海生寺浦にありて本祥寺と号し密

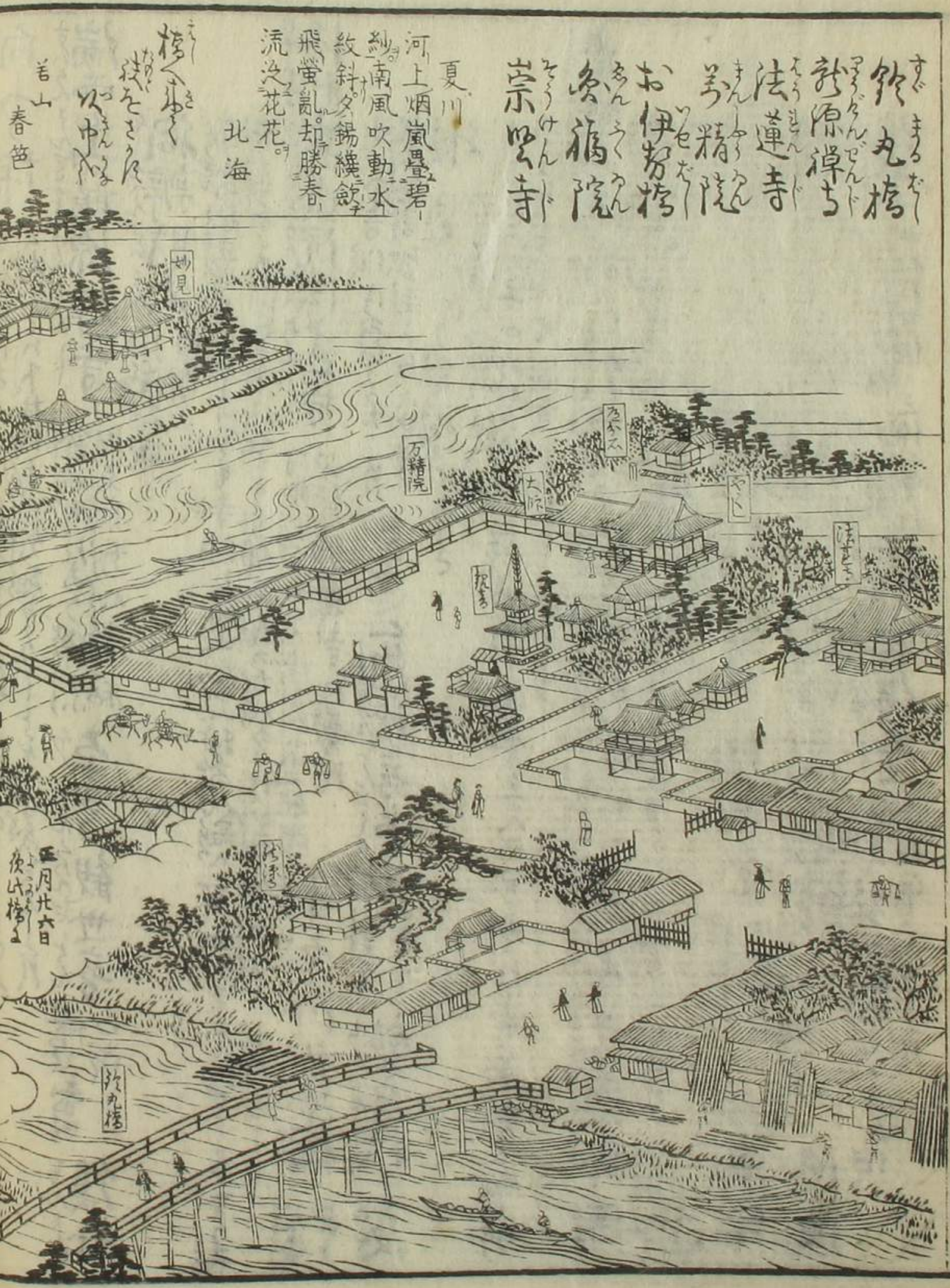
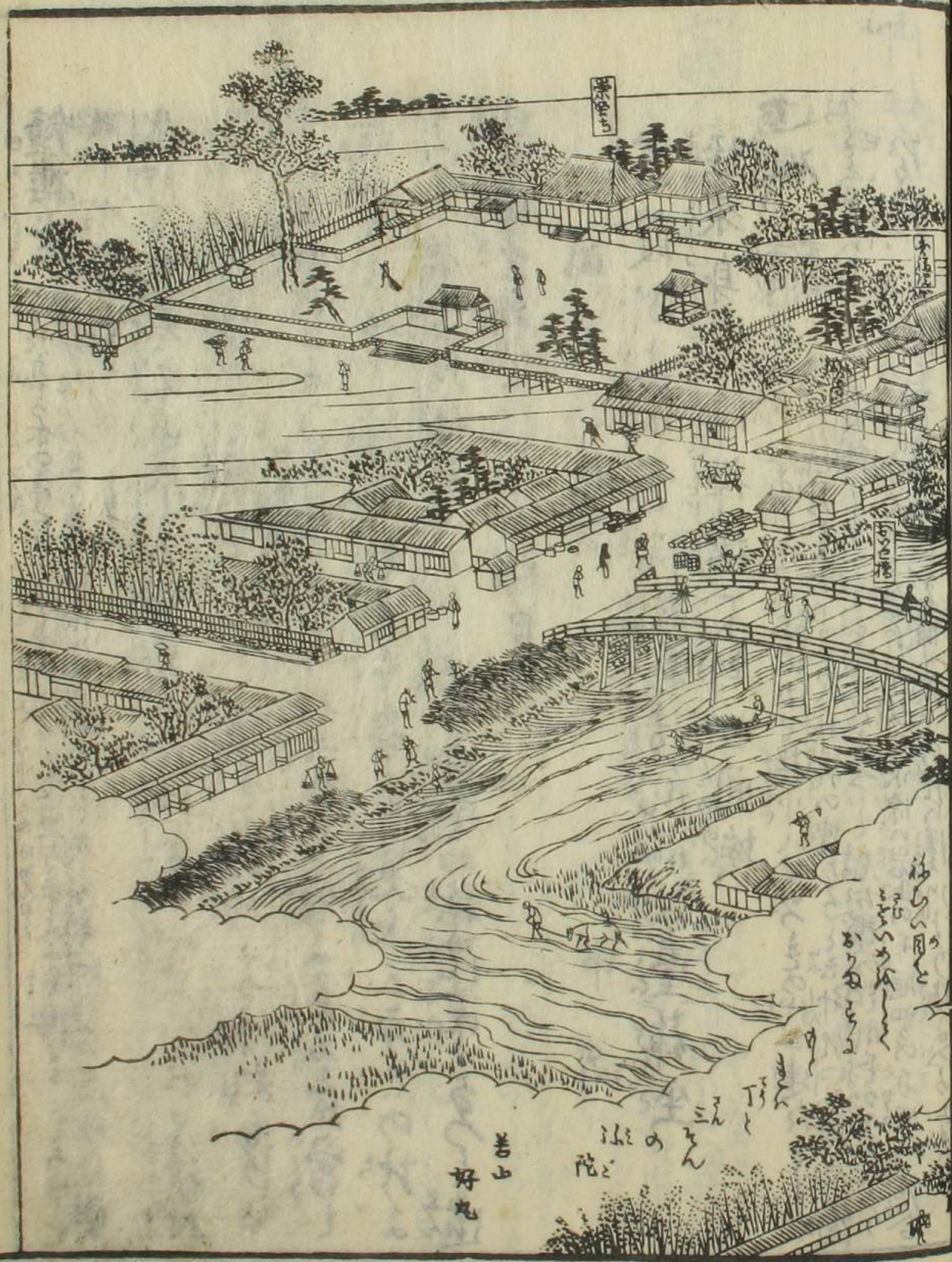
真光寺



宗の大徳藍より一が永仁四年奉願寺第三世の相承覚如上人  
祖師の伝傳と偏らぬんも中跡跡をさぐりたまふとれぬ  
私彼吹上の酒風一見一たまふのさぐり生来もふ道徳も  
宿ましくつくり他力を奉願の真旨候も原彦と誘ひり  
云下れ悟一乍ら旧染のそとを掃上人の後身とありま宗  
を奉りて中真の関候もいさるふ文明八年出ち第代  
法ののふさぐりまは上人出園に道寺のさめ出院に中掩  
ましくける御回をさるる光明の法もあはれまらちの号  
賜へ其後天文年中證如上人下向のさめ秘を置清供も候  
難貨の庄や河村に控くま先もつとると新建に果て宛永  
年中送賢十二代のさめまはく出院と造建れすあつら泉明  
日根郡嘉祥寺道園海部郡宇河村真光寺もあつらの掛  
所々々居持たりのさめ法印源彦中真とより遠ふ







妙見  
 丸橋  
 新原  
 法蓮寺  
 伊勢  
 宗明寺

夏川  
 河上烟嵐墨碧  
 紗南風吹動水  
 紋斜夕錫纒鏡  
 飛螢亂却勝春  
 流浣花  
 北海

善山  
 春色

五月廿六日

善山  
 好丸

鐘樓堂 これなる木の傍にあり小波内府を惣其を奉安す身附するところにして  
あはれん 此の傍にありかへしとまん  
にありて封境 やも廣きなり 諸寺 も執持する深刹ありしが  
中古兵燹 のあは灰燼となりぬそのくら僅くもまもるべき  
遠路 瓜をゆりて法印の香中興して寛永三年この地を  
うつ 奉る瓜客よりより承平の徳院をたると遠  
近の緇素 朝暮にこふ汲せり

遊 萬務精舎

中 訓

兼段 洲上水雲閑樹杪清風滿法臺靜坐  
怪來身骨淨禪棲不到世間埃

御伊勢橋 此の傍にありかへしとまん  
遷碑 寺内の庭前ありて井戸の邊にありて  
御伊勢橋 此の傍にありかへしとまん

橋より東と遠きと山が勢別ありて時あまやけと眺を  
甚よしと心ぐ多幸年七月廿二日の夜あり御堂のついでついで  
つねをまらこその新瓜自れと

七曜山園漏院妙見寺 小波内府にありて 奉き妙見大菩薩

大師也 此の傍にありかへしとまん  
薬師堂 中波内府にありて 奉き堂

中嶋山崇僧寺 此の傍にありかへしとまん  
崇僧寺 此の傍にありかへしとまん

崇僧寺 此の傍にありかへしとまん  
崇僧寺 此の傍にありかへしとまん  
崇僧寺 此の傍にありかへしとまん

山本枯<sup>し</sup>雨<sup>あめ</sup>あつら降<sup>ふり</sup>ぬる方の頼<sup>たの</sup>み<sup>と</sup>くは彼<sup>かの</sup>み<sup>の</sup>くそ  
ついで<sup>ついで</sup>今<sup>いま</sup>も<sup>も</sup>瓜<sup>うり</sup>ま<sup>の</sup>くぐく<sup>くぐ</sup>忽<sup>たち</sup>ち<sup>ち</sup>赤<sup>あか</sup>金<sup>かね</sup>の地<sup>ち</sup>と<sup>と</sup>や<sup>や</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>ま<sup>ま</sup>も  
中<sup>なかつ</sup>後<sup>ご</sup>ま<sup>ま</sup>今<sup>いま</sup>も<sup>も</sup>や<sup>や</sup>もん<sup>もん</sup>同<sup>どう</sup>浮<sup>う</sup>檀<sup>だん</sup>今<sup>いま</sup>も<sup>も</sup>や<sup>や</sup>もん

稚<sup>なま</sup>子の寺<sup>てら</sup>あ<sup>あ</sup>つ<sup>つ</sup>しい<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>ら<sup>ら</sup>う<sup>う</sup>那<sup>な</sup> 京 世<sup>よ</sup> 田<sup>で</sup>村<sup>むら</sup>

弥<sup>や</sup>勒<sup>りやく</sup>つ<sup>つ</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>と</sup>天<sup>あま</sup>照<sup>てる</sup>と<sup>と</sup>并<sup>なら</sup>ん<sup>ん</sup>を<sup>を</sup>本<sup>ほん</sup>立<sup>た</sup>す

志<sup>し</sup>摩<sup>ま</sup>神<sup>かみ</sup>社<sup>やしろ</sup>

延喜式神名帳曰志摩神社(糸井)奉遷神名(正一位)志摩神(續)日本後紀(仁明)帝(養和)十一年(乙酉)十一月朔(至)奉遷(紀伊)國(從五位下)志摩神(正五位下) ○文德(女)祿(義)二年(十月)乙丑(志摩)神(加)從四位下 ○三代(大)祿(貞)元(甲)申年(正月)二十七日(奉)遷(從四位下)志摩神(正四位上)十七(未)年(七月)十七日(從)三位(神)位(益)く(の)こ

紀<sup>き</sup>神<sup>かみ</sup>一<sup>ひと</sup>坐<sup>ま</sup>中<sup>なか</sup>津<sup>つ</sup>嶋<sup>じま</sup>姫<sup>ひめ</sup>命<sup>のみこと</sup>

紀(名)市(井)嶋(命) ○按(日本)紀(神)代(卷)曰(於是)天(照)天(真)名(井)結(狀)咀(嚼)而(吹)氣(貫)之(狹)霧(所)生(神) 天(照)名(井)結(狀)咀(嚼)而(吹)氣(貫)之(狹)霧(所)生(神) 彌(田)田(心)姫(次)端(津)姫(次)市(井)嶋(命)三(女)矣(矣) 志(摩)神(社) 古(事)記(曰)故(其)先(所)生(之)神(多)紀(理)毘(賣)命(者)坐(百)形(之)奥(津)宮(次)市(次)市(島)比(賣)

命<sup>のみこと</sup>者<sup>なり</sup>坐<sup>ま</sup>百<sup>ひゃく</sup>形<sup>がた</sup>之<sup>の</sup>中<sup>なか</sup>津<sup>つ</sup>宮<sup>みや</sup>次<sup>つぎ</sup>田<sup>の</sup>津<sup>の</sup>比<sup>ひ</sup>賣<sup>を</sup>命<sup>のみこと</sup>者<sup>なり</sup>坐<sup>ま</sup>百<sup>ひゃく</sup>形<sup>がた</sup>之<sup>の</sup>邊<sup>の</sup>津<sup>つ</sup>宮<sup>みや</sup>此<sup>こゝ</sup>三<sup>さん</sup>柱<sup>すゐ</sup>  
神<sup>かみ</sup>者<sup>なり</sup>曾<sup>もろ</sup>形<sup>がた</sup>君<sup>きみ</sup>等<sup>ら</sup>之<sup>の</sup>以<sup>もつ</sup>伊<sup>い</sup>都<sup>と</sup>久<sup>く</sup>二<sup>に</sup>前<sup>まへ</sup>大<sup>おほ</sup>神<sup>かみ</sup>者<sup>なり</sup>也<sup>なり</sup> ○舊<sup>ふる</sup>事<sup>こと</sup>紀<sup>き</sup>曰<sup>い</sup>中<sup>なか</sup>津<sup>つ</sup>嶋<sup>じま</sup>  
姫<sup>ひめ</sup>命<sup>のみこと</sup>者<sup>なり</sup>是<sup>こゝ</sup>所<sup>こゝ</sup>居<sup>ゐ</sup>于<sup>に</sup>中<sup>なか</sup>津<sup>つ</sup>宮<sup>みや</sup>次<sup>つぎ</sup>市<sup>の</sup>井<sup>の</sup>嶋<sup>の</sup>姫<sup>の</sup>命<sup>のみこと</sup>也<sup>なり</sup> 曾<sup>もろ</sup>形<sup>がた</sup>ハ<sup>ハ</sup>別<sup>わか</sup>れ<sup>れ</sup>名<sup>な</sup>抄<sup>ず</sup>又<sup>また</sup>筑<sup>つく</sup>  
前<sup>まへ</sup>國<sup>くに</sup>宗<sup>むね</sup>像<sup>しるし</sup>加<sup>か</sup>多<sup>た</sup>那<sup>な</sup>と<sup>と</sup>あり<sup>あり</sup>又<sup>また</sup>筑<sup>つく</sup>前<sup>まへ</sup>國<sup>くに</sup>風<sup>かぜ</sup>土<sup>つち</sup>記<sup>し</sup>曰<sup>い</sup>宗<sup>むね</sup>像<sup>しるし</sup>大<sup>おほ</sup>神<sup>かみ</sup>自<sup>より</sup>天<sup>あま</sup>降<sup>くだり</sup>居<sup>ゐ</sup>神<sup>かみ</sup>  
門<sup>かど</sup>山<sup>やま</sup>之<sup>の</sup>時<sup>とき</sup>以<sup>もつ</sup>青<sup>あお</sup>紐<sup>ひも</sup>玉<sup>たま</sup>置<sup>お</sup>奥<sup>おく</sup>宮<sup>みや</sup>之<sup>の</sup>表<sup>の</sup>以<sup>もつ</sup>八<sup>はち</sup>尺<sup>ぢ</sup>此<sup>こゝ</sup>青<sup>あお</sup>紐<sup>ひも</sup>玉<sup>たま</sup>置<sup>お</sup>中<sup>なか</sup>津<sup>つ</sup>宮<sup>みや</sup>之<sup>の</sup>表<sup>の</sup>以<sup>もつ</sup>八<sup>はち</sup>  
咫<sup>ゆさ</sup>鏡<sup>かみ</sup>置<sup>お</sup>邊<sup>の</sup>宮<sup>みや</sup>之<sup>の</sup>表<sup>の</sup>以<sup>もつ</sup>三<sup>さん</sup>表<sup>ひょう</sup>成<sup>なり</sup>神<sup>かみ</sup>體<sup>た</sup>之<sup>の</sup>形<sup>がた</sup>細<sup>こ</sup>置<sup>お</sup>二<sup>に</sup>宮<sup>みや</sup>即<sup>すなは</sup>隱<sup>か</sup>之<sup>の</sup>因<sup>ゆゑ</sup>曰<sup>い</sup>身<sup>み</sup>形<sup>がた</sup>  
那<sup>な</sup>後<sup>ご</sup>人<sup>ひと</sup>改<sup>か</sup>曰<sup>い</sup>宗<sup>むね</sup>像<sup>しるし</sup>一<sup>ひと</sup>柱<sup>はしら</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>も<sup>も</sup>考<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>ま<sup>ま</sup>志<sup>し</sup>摩<sup>ま</sup>神<sup>かみ</sup>社<sup>やしろ</sup>と<sup>と</sup>稱<sup>なづ</sup>か<sup>か</sup>す<sup>す</sup>其<sup>その</sup>の<sup>の</sup>本<sup>ほん</sup>  
乃<sup>なり</sup>中<sup>なか</sup>津<sup>つ</sup>宮<sup>みや</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>る<sup>る</sup>也<sup>なり</sup> 又<sup>また</sup>中<sup>なか</sup>津<sup>つ</sup>宮<sup>みや</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>る<sup>る</sup>は<sup>は</sup>中<sup>なか</sup>津<sup>つ</sup>宮<sup>みや</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>る<sup>る</sup>也<sup>なり</sup>  
神<sup>かみ</sup>未<sup>いま</sup>社<sup>やしろ</sup>天<sup>あま</sup>照<sup>てる</sup>皇<sup>みかど</sup>女<sup>みこと</sup>神<sup>かみ</sup>相<sup>あひ</sup>殿<sup>だん</sup>天<sup>あま</sup>照<sup>てる</sup>皇<sup>みかど</sup>女<sup>みこと</sup>神<sup>かみ</sup>相<sup>あひ</sup>殿<sup>だん</sup>焼<sup>やく</sup>火<sup>ひ</sup>大<sup>おほ</sup>推<sup>お</sup>現<sup>あら</sup>祠<sup>ひら</sup> ○振<sup>ふ</sup>  
法<sup>ほ</sup>藏<sup>さう</sup>王<sup>おう</sup>推<sup>お</sup>現<sup>あら</sup>脚<sup>あし</sup>長<sup>なが</sup>的<sup>てき</sup>場<sup>ば</sup>也<sup>なり</sup> 中<sup>なか</sup>津<sup>つ</sup>宮<sup>みや</sup>之<sup>の</sup>表<sup>の</sup>以<sup>もつ</sup>八<sup>はち</sup>尺<sup>ぢ</sup>此<sup>こゝ</sup>青<sup>あお</sup>紐<sup>ひも</sup>玉<sup>たま</sup>置<sup>お</sup>中<sup>なか</sup>津<sup>つ</sup>宮<sup>みや</sup>之<sup>の</sup>表<sup>の</sup>以<sup>もつ</sup>八<sup>はち</sup>  
皇<sup>みかど</sup>居<sup>ゐ</sup>所<sup>ところ</sup>之<sup>の</sup>中<sup>なか</sup>津<sup>つ</sup>宮<sup>みや</sup>也<sup>なり</sup> 皇<sup>みかど</sup>居<sup>ゐ</sup>所<sup>ところ</sup>之<sup>の</sup>中<sup>なか</sup>津<sup>つ</sup>宮<sup>みや</sup>也<sup>なり</sup> 皇<sup>みかど</sup>居<sup>ゐ</sup>所<sup>ところ</sup>之<sup>の</sup>中<sup>なか</sup>津<sup>つ</sup>宮<sup>みや</sup>也<sup>なり</sup> 皇<sup>みかど</sup>居<sup>ゐ</sup>所<sup>ところ</sup>之<sup>の</sup>中<sup>なか</sup>津<sup>つ</sup>宮<sup>みや</sup>也<sup>なり</sup>  
○祇<sup>せ</sup>園<sup>えん</sup>社<sup>やしろ</sup> 初<sup>はつ</sup>後<sup>ご</sup>の<sup>の</sup>時<sup>とき</sup>三<sup>さん</sup>年<sup>ねん</sup>遷<sup>うつ</sup>遷<sup>うつ</sup>儀<sup>ぎ</sup>

ついで人民死にたるものありては、  
その人等、  
石燈籠一基  
の古、  
夫は、  
星霜と逝く、  
原義、  
天正十二年二月下旬より四月に、  
地、  
火、  
八幡宮、  
後田彦大神、  
天王の森、  
古堤、  
傾城、  
溜池、  
屈原、

ついで人民死にたるものありては、  
その人等、  
石燈籠一基  
の古、  
夫は、  
星霜と逝く、  
原義、  
天正十二年二月下旬より四月に、  
地、  
火、  
八幡宮、  
後田彦大神、  
天王の森、  
古堤、  
傾城、  
溜池、  
屈原、

ついで人民死にたるものありては、  
その人等、  
石燈籠一基  
の古、  
夫は、  
星霜と逝く、  
原義、  
天正十二年二月下旬より四月に、  
地、  
火、  
八幡宮、  
後田彦大神、  
天王の森、  
古堤、  
傾城、  
溜池、  
屈原、

ついで人民死にたるものありては、  
その人等、  
石燈籠一基  
の古、  
夫は、  
星霜と逝く、  
原義、  
天正十二年二月下旬より四月に、  
地、  
火、  
八幡宮、  
後田彦大神、  
天王の森、  
古堤、  
傾城、  
溜池、  
屈原、

ついで人民死にたるものありては、  
その人等、  
石燈籠一基  
の古、  
夫は、  
星霜と逝く、  
原義、  
天正十二年二月下旬より四月に、  
地、  
火、  
八幡宮、  
後田彦大神、  
天王の森、  
古堤、  
傾城、  
溜池、  
屈原、

ついで人民死にたるものありては、  
その人等、  
石燈籠一基  
の古、  
夫は、  
星霜と逝く、  
原義、  
天正十二年二月下旬より四月に、  
地、  
火、  
八幡宮、  
後田彦大神、  
天王の森、  
古堤、  
傾城、  
溜池、  
屈原、

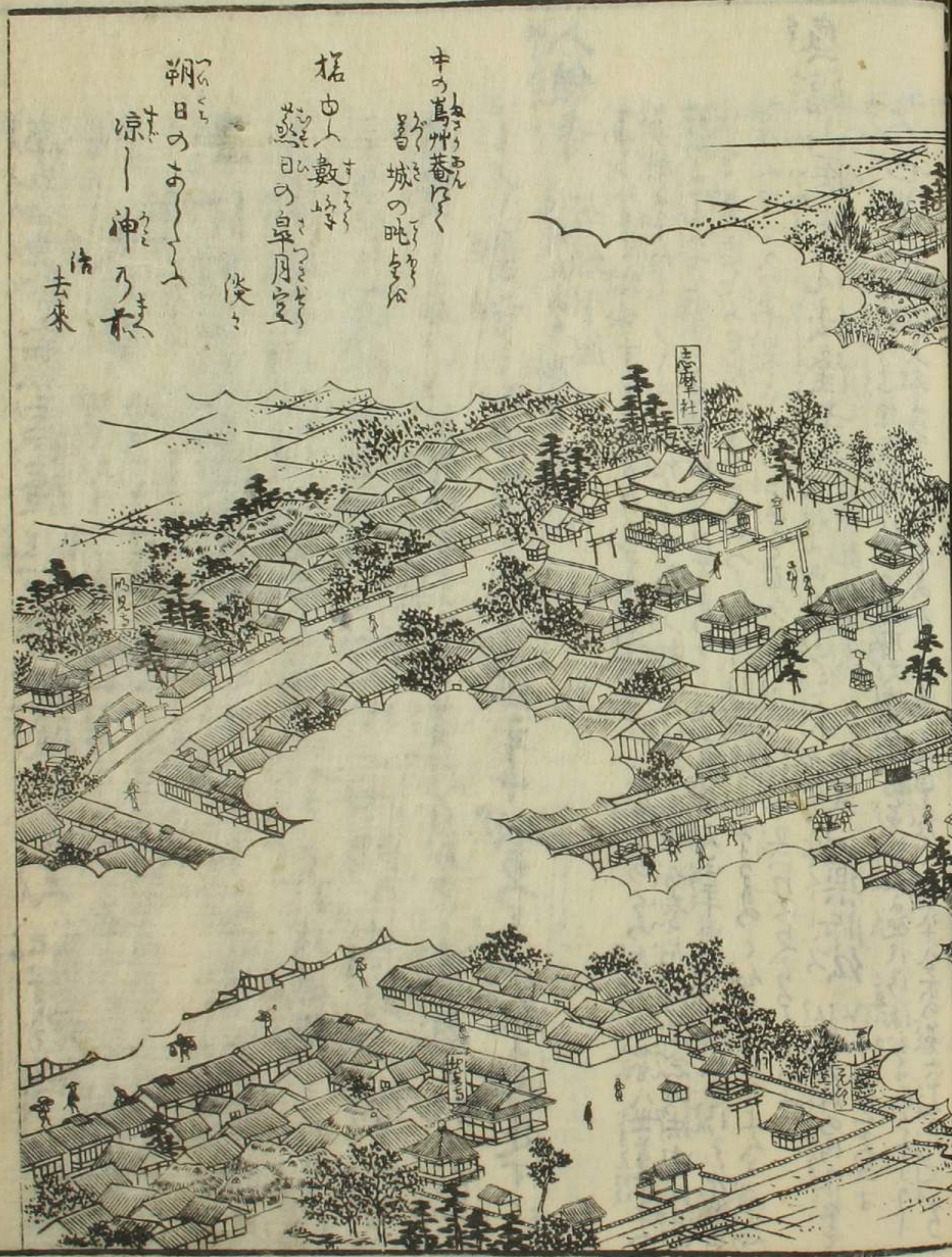
ついで人民死にたるものありては、  
その人等、  
石燈籠一基  
の古、  
夫は、  
星霜と逝く、  
原義、  
天正十二年二月下旬より四月に、  
地、  
火、  
八幡宮、  
後田彦大神、  
天王の森、  
古堤、  
傾城、  
溜池、  
屈原、

ついで人民死にたるものありては、  
その人等、  
石燈籠一基  
の古、  
夫は、  
星霜と逝く、  
原義、  
天正十二年二月下旬より四月に、  
地、  
火、  
八幡宮、  
後田彦大神、  
天王の森、  
古堤、  
傾城、  
溜池、  
屈原、

ついで人民死にたるものありては、  
その人等、  
石燈籠一基  
の古、  
夫は、  
星霜と逝く、  
原義、  
天正十二年二月下旬より四月に、  
地、  
火、  
八幡宮、  
後田彦大神、  
天王の森、  
古堤、  
傾城、  
溜池、  
屈原、







朝日あさひのあまあまの  
 涼すずし神かみのまた  
 去來きょらい  
 橋はし由ゆ人ひと敷しきのまら  
 日ひのあまの泉いづみ月つき宮みや堂どう  
 俊とよ  
 中なかつのあまの菴あん菴あんはく  
 善ぜん城じやうのあまの心こころ



志摩しまた作しやく社しゃ  
 八幡はちまん宮みや河か  
 後田ごてん彦ひこ河か  
 辨はん財さい天てん河か  
 入い願がん寺じ  
 大だい倉くら寺じ  
 巧くわう匠じやう寺じ  
 法ほふ隆りゆう寺じ  
 心しん見けん寺じ  
 鏡きやう寺じ  
 會かい賢けん河か

奉る虚空藏菩薩 法天寺 眼檀歡喜天 長子八葉令依南郡

大原堂 弘法大師の像を祀る。南郡大原町の北にあり。弘法大師の御影を祀る。弘法大師の御影を祀る。弘法大師の御影を祀る。

角子有城昔のわづ湯子の祥ありてこ山威得たまひ

とみつら通國海部郡西の社の北に津利を草創し彼寺像と

安置ししに物換星移り幾たびもわづ荒廢なれども

しく葉寺とありたりしに享保年中にありて地を再建す

入願寺 日村にあり。津利にあり。

真福山医王院法隆寺 日村にあり。津利にあり。 奉る薬師仏 弘法大師の御作なり。

大砂寺 弘法大師の御作なり。津利にあり。

光明真言一億八千万遍供養塔 津利の南にあり。弘法大師の御作なり。

地藏堂 津利の南にあり。弘法大師の御作なり。

鎮守祠 天竺の神を祀る。津利にあり。

由緒の古刹なりて用巻はむらじり紀三井山宝性院乃遠

才法印心越を中興し享保二年ゆたよりつたてり

金龍山五大院明見寺 日村にあり。津利にあり。

四大明王の像 弘法大師の御作なり。津利にあり。

大師堂 弘法大師の御作なり。津利にあり。

由緒の古刹なりて用巻はむらじり紀三井山宝性院乃遠

七巻伽藍の巨刹なり其始妙見と称すし後々の雲像ハ別

市小治江のまにゆえに賣神のけし神ままを終る奉地佛

たり奉りしより寺も幾たびも天竺の兵火より傷

誰再建成る者もあらずに寺の事とぬして荒蕪



此より先... 享保十四年長瀬上人

圓君の命を奉じて中興し南無堂宇と建立して之を瓜

金龍山長照院妙見と号せり

圓君より奉る五太の香像と壽階を以て願所と命じ

るこの故に宝曆年中洛東勸修寺宮より院号を賜りて五

大院とありしに什寶未あまざりて又も故奉するに後

蓮池納涼明見寺園上賦

祇南海

蓮葩腴玉沼影卧銀漪非下清涼地焉知皎潔姿高

風扇上尚娥月尊前映石磊塊良堪沃雪浮金屈危

長東山龍護院安樂禪寺

奉る大日如来

服士不動明王

作者也

王子稻荷祠

向陽山蓮花院淨福寺

奉る阿弥陀佛

座像... ありしに四尺二寸

淨福寺

養光寺

觀音寺

千手院

季春遊觀音寺

吟杖共敲蕭寺

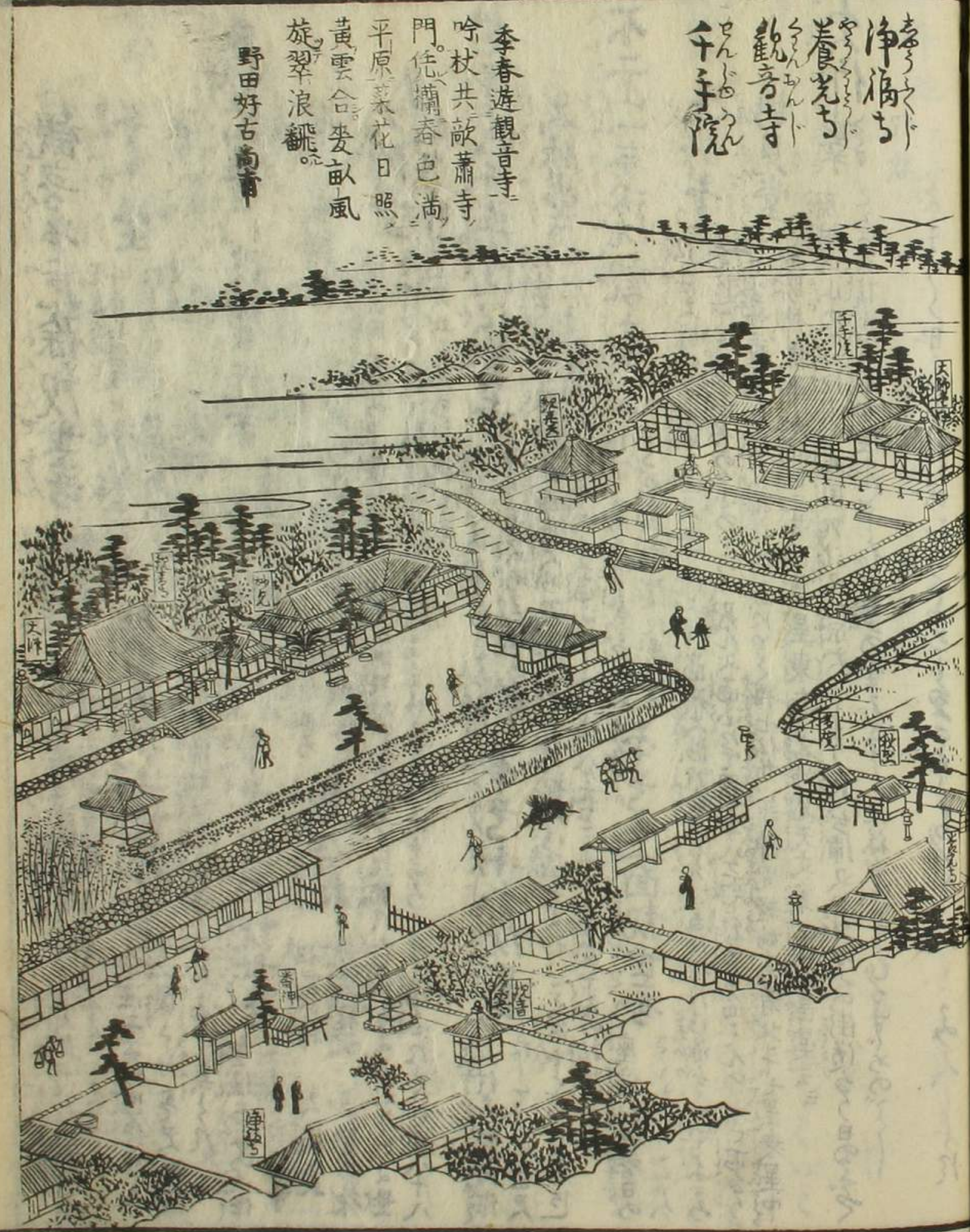
門凭欄春色滿

平原菜花日照

黃雲合麥畝風

旋翠浪翻

野田好古尚書



觀音也元除觀世音

立像長一尺九寸五分唐の元除の立像にして彫刻あり一十二神の像ありその一ありなり

千手堂

千手観音とあり長五尺五寸

地藏半子安地持子

立像一尺四寸

真隆山普門院養光寺

日山の山あり古刹なり本尊十一面観世音立像一尺四寸

服土薬師仏

法隆寺の古刹なり本尊の鎮守祠

大際堂

法隆寺の古刹なり本尊の鎮守祠

紫雲山千手院弘誓寺

法隆寺の古刹なり本尊の鎮守祠

不二山三寶院觀音寺

法隆寺の古刹なり本尊の鎮守祠

大際堂

法隆寺の古刹なり本尊の鎮守祠

妙見堂

法隆寺の古刹なり本尊の鎮守祠

欠作譯

府城の山の入口にて西國の道なり

水牛池

日所西側の山あり水牛と名

水くく利鎌

京 世村

傘師

法隆寺の古刹なり本尊の鎮守祠

神留山照光院

法隆寺の古刹なり本尊の鎮守祠

大師堂

法隆寺の古刹なり本尊の鎮守祠

三部大明神祠祀神三座

法隆寺の古刹なり本尊の鎮守祠

神樂舎神供所

法隆寺の古刹なり本尊の鎮守祠

當山運曆年中弘法大師諸國神修の初宗月弘通のたも造建

なすもあも其後後羊の星霜累り中葉以後の兵乱も堂塔め方あり

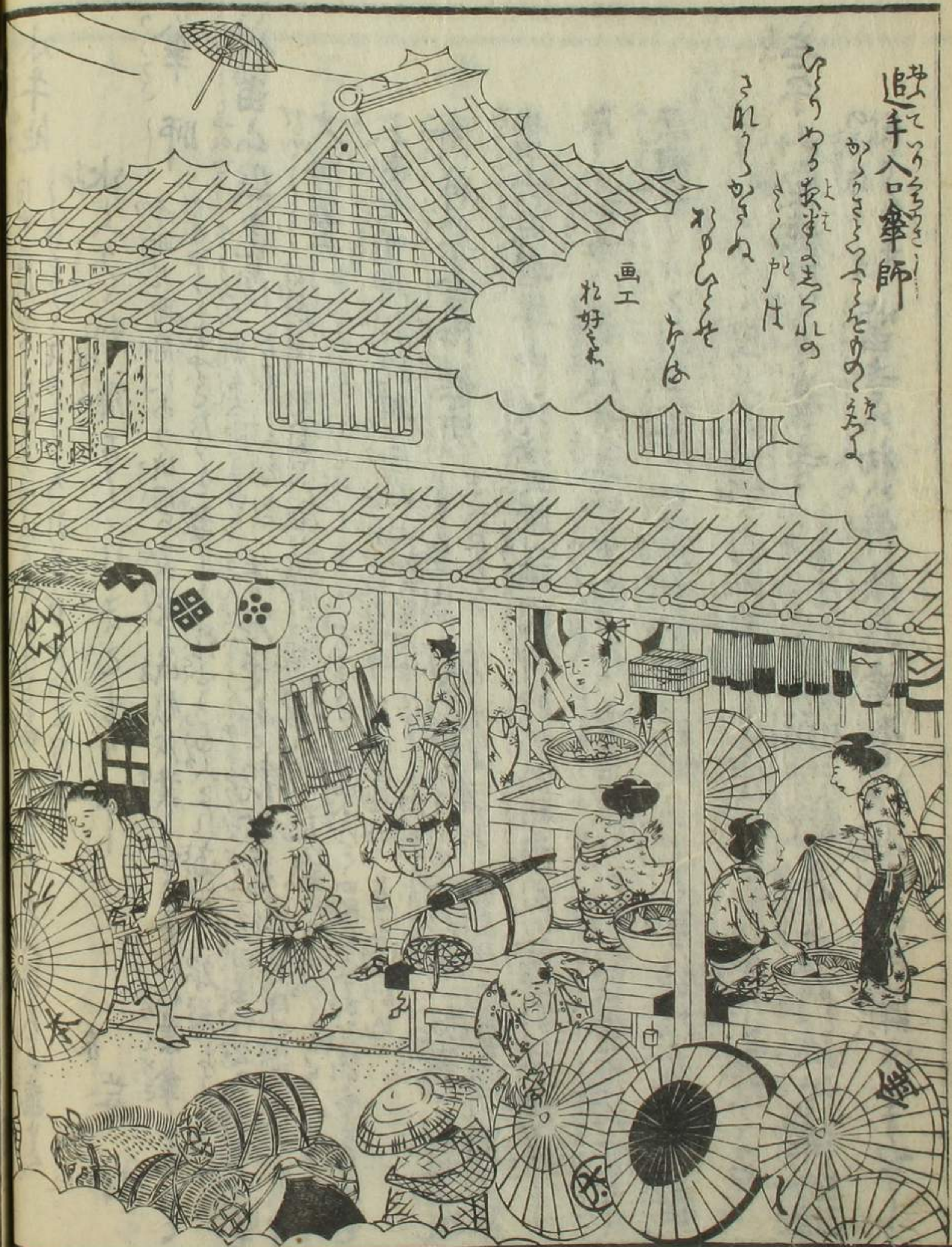
灰燼せりごとく大徳の應驗古今にありなり

右山聖徳院專養寺

法隆寺の古刹なり本尊の鎮守祠

當寺ハ初ハ佛法真隆を徳右子の開闢はませり

法隆寺の古刹なり本尊の鎮守祠



三浦伸也  
照光  
生養  
柳の井

ほろり  
おん

つと  
如泉



三浦國重係部依々本に在るを字の上宮寺の法流はて六口園  
 宗の梵堂なりしが中は二例の武人よ安藤左衛門尉祐綱と云  
 りの送て蓮の号一上宮寺第二十四世で後して寺  
 大兼宗頭のは瓜修一なるが不思議なる法流と共了始  
 祖親を人にて國夫作の宿なる柳也と得しなり  
 真性得語の法縁よりく竟は本宗に帰順し他力念仏  
 の法を奉して佛弟子となりしよりとゆらも随て本宗  
 の末流と云らるぬ○什宝祖師を人御自作市面像  
 市面像のわらうを列立間の標を刑アなる射者務に始  
 捕り七世の孫千原因我か名を承るるの上流のわらうの市面像と持して  
 人の市面像と云ふるも上人の得たまはるるなりと云ふは  
 裏面は二その和字おん六六の名字と云ふ地と云ふは  
 あらうのあらうと云ふは打條して佛弟子と云ふり  
 と造立し彼市面像と云ふはつとく位を堅固の松切を  
 寺につとくは佛後抄おんひけり旧の法流の法也に刑筋なる射者務なるの  
 多世の復遷せしてまはるることと云ふは刑アなる射と云ふは人の直也なる  
 川右野脚投を村彦村山と云ふ寺の元基をまはけ房



高野寺

大正

聖地蔵

若山 吐月

九百年

九百年

九百年

九百年

九百年

九百年

九百年

九百年

九百年

九百年

九百年

九百年

九百年

九百年

九百年

九百年

九百年

九百年

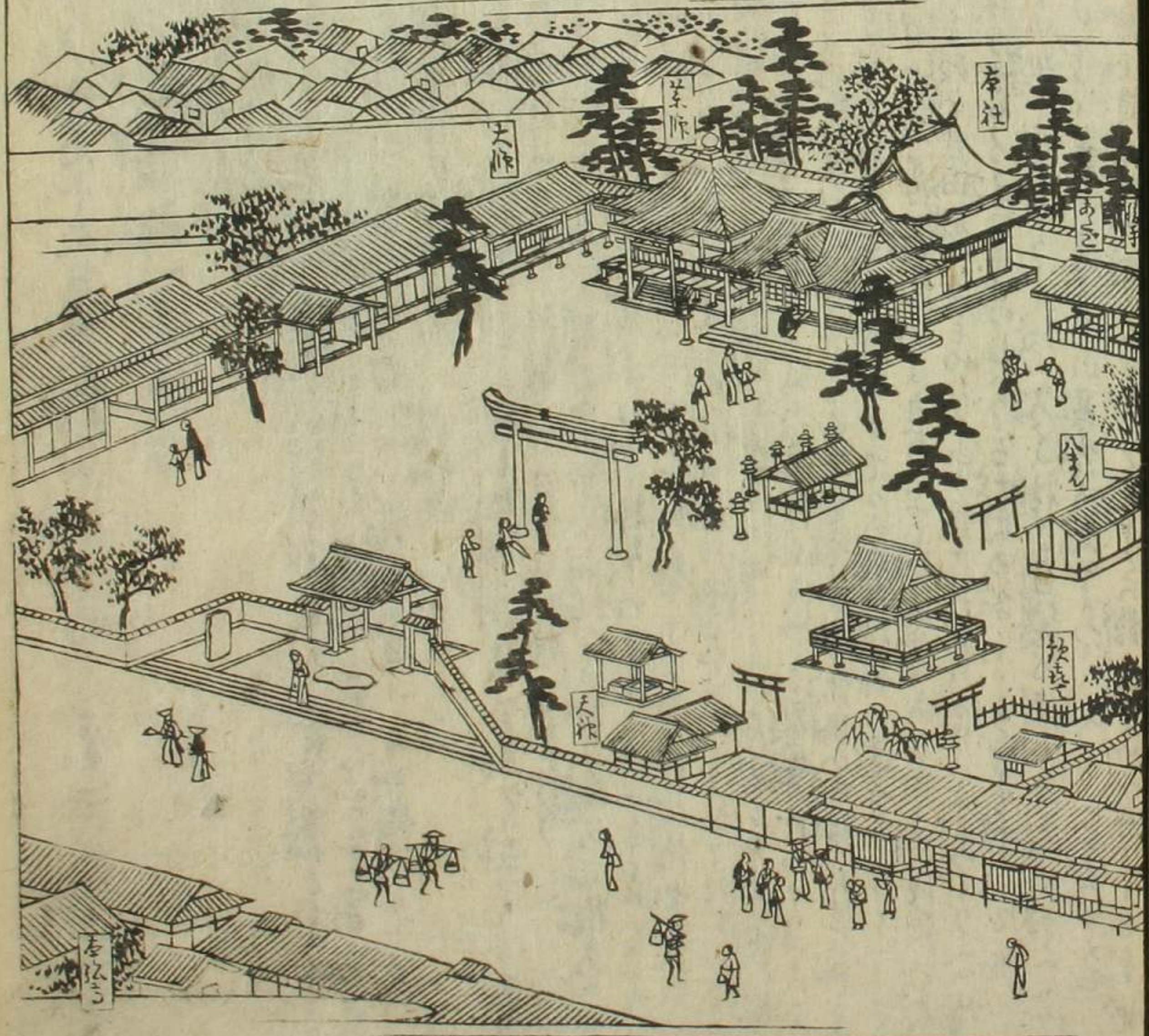
九百年

九百年



けつは一年天下飢饉... 百穀種瓜冬ひ... 人民すて... 泉を續き方便もたぐれ... 枯渴瓜まのり... 丹心瓜抽く冥助と... 毛の瓜... 疆域の四至瓜... 泉州貝塚の

本社住吉  
利益院  
乾法寺



神輿より瓜旋入るといふ  
 日々にわきまなく造建に  
 たりけるより以来常火の  
 といふ法人の杖の雪霞  
 跡生廿一日の坊内焼  
 つゝんことありしこと  
 ちんといふことありしこと

住吉大神宮 本住吉 本宮 本宮 本宮  
 本宮 本宮 本宮 本宮 本宮  
 の比地地よりなるもの  
 よろしく世に今も瀬崎の住吉宮といひ  
 まいり勝手の神のまへより地主の神  
 まつ所よりいふは當日九餘所の生土神

り市後あり九月十三日午の解石投ふりありて西度なり

バクシの願と多詣群とをやち

別當利基院

大師堂

薬師堂

# 市場

# の表

つり舟廿五卒年の思とる土地の性善村は松谷のいそぎとて...

推古天皇六年夏四月鶴二味を難波の村は養一むと...

明應のころは孝仁本願寺中堂あり信長へ贈て...

壮麗の語あり耶教紀ゆ唯難波の村のあたりに...

をりこの地はたまたまそれといふありて...

なりこの地はたまたまそれといふありて...

味師内省林や豆田古が妹山下願日賣をやら...

ていふありて... 樹の仲林あり...

乃孫なり... 貴命兄弟...

上比賣は僧りん... 賦しん返者...

この地は... 貴命兄弟...

この地は... 賦しん返者...

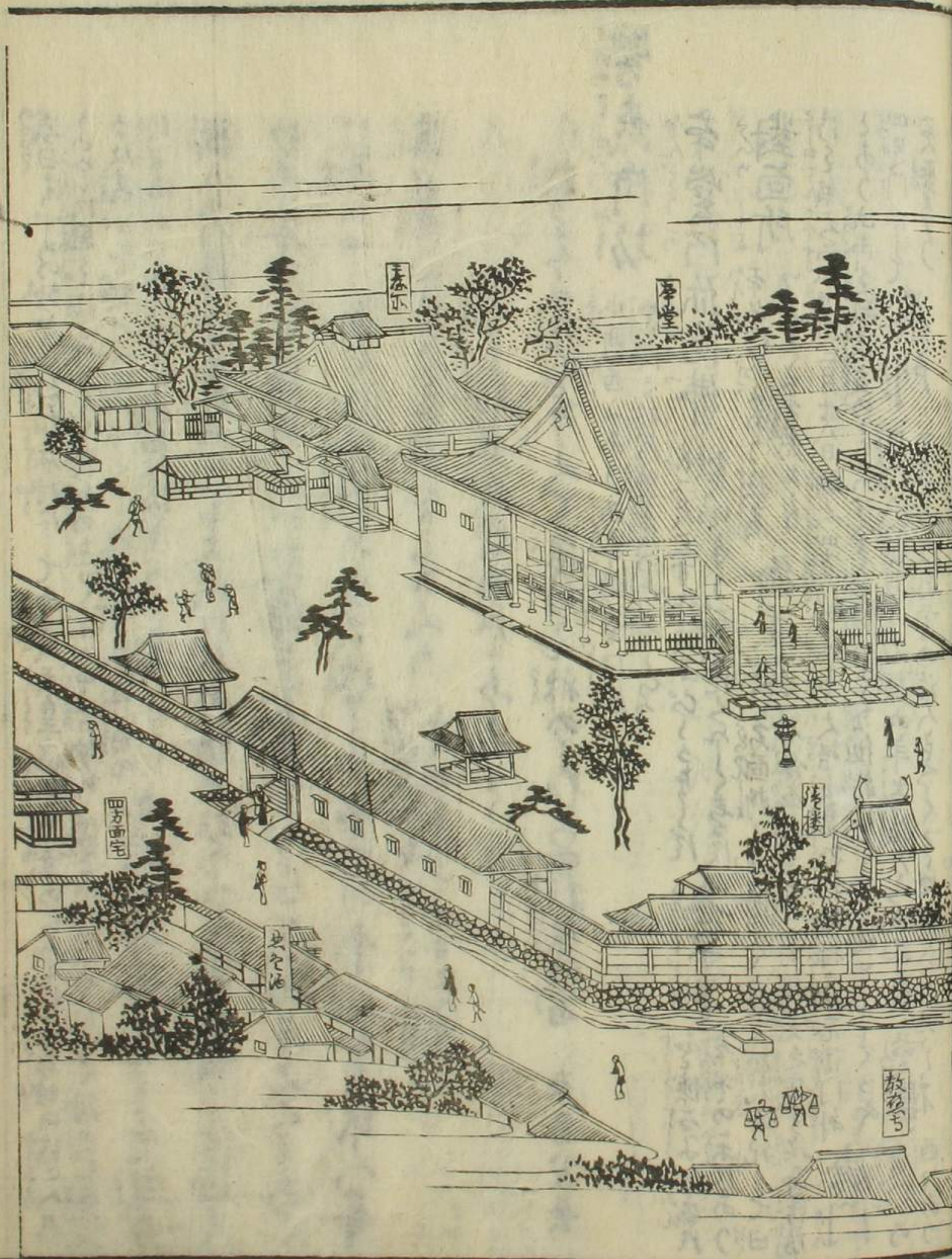
この地は... 貴命兄弟...











三たのりのとがく  
 鷲堂  
 西本願寺

或曰... 武天皇... 古史... 考...  
かみ... 代... 最... 教...  
寄集... 伊... 二月... 九月...  
十月... 十五日...  
津... 杉原... 氏... 家... 瓜... 々...  
ね... へ... へ... へ... へ... へ... へ...  
本... 居... 宜... 長...  
唐... 門... あり

鼓... 唐... 門... あり  
集... 令... 所...  
御... 主... 殿...  
唐... 門... あり

津... 杉原... 氏... 家... 瓜... 々...

ね... へ... へ... へ... へ... へ... へ...

本... 居... 宜... 長...

唐... 門... あり

御... 主... 殿...

集... 令... 所...

鼓... 唐... 門... あり

世... の... 者... 徳... 信... 心... 顯... 如... 上... 人... の... 卍... 創... ち... 初... 造... 圓... 法... を... 即... 此... 水... 浦... へ...

文... 明... 八... 年... 日... 郡... 加... 長... 谷... の... 名... 居... へ... 引... 凡... 音... 漢... 埃... へ... 一... 百... 日... ち... ち...

を... 乃... 活... せ... 満... 顔... の... 後... へ... つ... つ... 大... 士... 枕... 上... へ... 坐... せ... た... ま... い... 明... 日...

を... 乃... 活... せ... 満... 顔... の... 後... へ... つ... つ... 大... 士... 枕... 上... へ... 坐... せ... た... ま... い... 明... 日...

を... 乃... 活... せ... 満... 顔... の... 後... へ... つ... つ... 大... 士... 枕... 上... へ... 坐... せ... た... ま... い... 明... 日...

を... 乃... 活... せ... 満... 顔... の... 後... へ... つ... つ... 大... 士... 枕... 上... へ... 坐... せ... た... ま... い... 明... 日...

を... 乃... 活... せ... 満... 顔... の... 後... へ... つ... つ... 大... 士... 枕... 上... へ... 坐... せ... た... ま... い... 明... 日...

を... 乃... 活... せ... 満... 顔... の... 後... へ... つ... つ... 大... 士... 枕... 上... へ... 坐... せ... た... ま... い... 明... 日...

を... 乃... 活... せ... 満... 顔... の... 後... へ... つ... つ... 大... 士... 枕... 上... へ... 坐... せ... た... ま... い... 明... 日...

を... 乃... 活... せ... 満... 顔... の... 後... へ... つ... つ... 大... 士... 枕... 上... へ... 坐... せ... た... ま... い... 明... 日...

を... 乃... 活... せ... 満... 顔... の... 後... へ... つ... つ... 大... 士... 枕... 上... へ... 坐... せ... た... ま... い... 明... 日...

を... 乃... 活... せ... 満... 顔... の... 後... へ... つ... つ... 大... 士... 枕... 上... へ... 坐... せ... た... ま... い... 明... 日...

を... 乃... 活... せ... 満... 顔... の... 後... へ... つ... つ... 大... 士... 枕... 上... へ... 坐... せ... た... ま... い... 明... 日...

を... 乃... 活... せ... 満... 顔... の... 後... へ... つ... つ... 大... 士... 枕... 上... へ... 坐... せ... た... ま... い... 明... 日...

果が慈志の切なるをよらむにむねくむにむねく且もくく其旨を  
のてあつて今既まこころはれなるも心せうくはけり  
従ひてこころもあはれ淨はなるも心せうくはけり  
下と約をなすは僧のこころも向く別とすこころはけり  
をま其淨はなるも心せうくはけり  
認め待とすは僧のこころも向く別とすこころはけり  
こころはけり  
むねく彼僧のこころも向く別とすこころはけり  
はせゆりくこころも向く別とすこころはけり  
なまひ未代世尊の心せうくはけり  
念仏の要義は生れの利益と示したまひて其心を権者の教  
にま今迄の雜行頭下地言下地安心定し隨者の深きも其  
蓮上人の法門のこころも向く別とすこころはけり

疑へばこそ乃難深しと徒弟もその法もなまひて其心を  
つとたふすは上人のこころも向く別とすこころはけり  
諸法をのりて御座に弘通なすは福のこころも向く別とすこころはけり  
善くは生と信じてなまひて其心を権者の深きも其  
とそ乃已ち屋舎をて送場とすは山林もその資用は供せ  
る上人の徳は止む難くは地あるもなまひて其心を権者の深  
集ひてその各同法誦誦しては法は信じて其心を権者の深  
蓋すその字の通に弘通するこころは地あるもなまひて其心を  
終て地もその各同法誦誦しては法は信じて其心を権者の深  
に後るこころも向く別とすこころはけり  
まはりて其心を権者の深きも其  
乃自画のこころも向く別とすこころはけり

よろしく如行りつどもはるゑ志の燃しがたれはるるるとそとに  
毫と保く九字十字の号なりし表書成さなり物に  
了災を成けりあまりの焼くは流るゑふと戴さ成て奉  
一去く送場を客一奉と奉成りも成るる則今も浦に  
傳る所の二名の神影にあり 裏書ハ什宝 とうふ永正四年  
上人は送場は同郡黒江村に居たりしなまの流り天文十九年證  
如上人よりいれ秋休勒寺山に移りたまふ旧址とて今も  
終る永祿六年二月顯如大僧正思うに終りてこの宇治御覽  
表の地を移りてなまの流り天文八年僧正大板と御用院 石山  
退去の御覽 あつては御堂に移りたりあつて凡く四年その後  
而上治あつてなまの流り前には石山寺に安んずる所の奉り彼授乳  
に焼失せさせたまひし終る浦御堂に安んずる所の奉り奉  
持し終る浦に安んずる人 今京師西御坊の神木尊 ことに

於て當浦にありしやせとあつてなまの流りあつてはるる  
門徒ふたふたなる後本孫市 孫市 なるもの榮谷八幡宮の  
祠に秘置りし靈像と移り奉りてこの山に安んずる別々の奉り  
これあるはなまの流り此奉りの靈強奇特なる凡智のそしはるる  
ざるあり嘗本常徳寺なるもの由國榮谷と成りて  
日西に推り自善授院と造立りて此を大善寺 旧址 と  
て初めに寺に安んずるはなまの流り西なるが一年兵火の難ありて  
やうとくく焼七せりたなる後や奉りて後火のうらに成りて  
自ら善城の山上よりあつてなまの流り是よりして後の中  
こと夥し御人の山に異りて易く其のなまの流りてはるる  
に彼大善寺の奉りの叢中に安んずるなまの流りてはるる  
はるる像よりぞ成りたまひける御人のあつてはるる奇物な  
それゆへこの箇に藏りてはるる八幡宮の祠に秘置りてはるる  
識





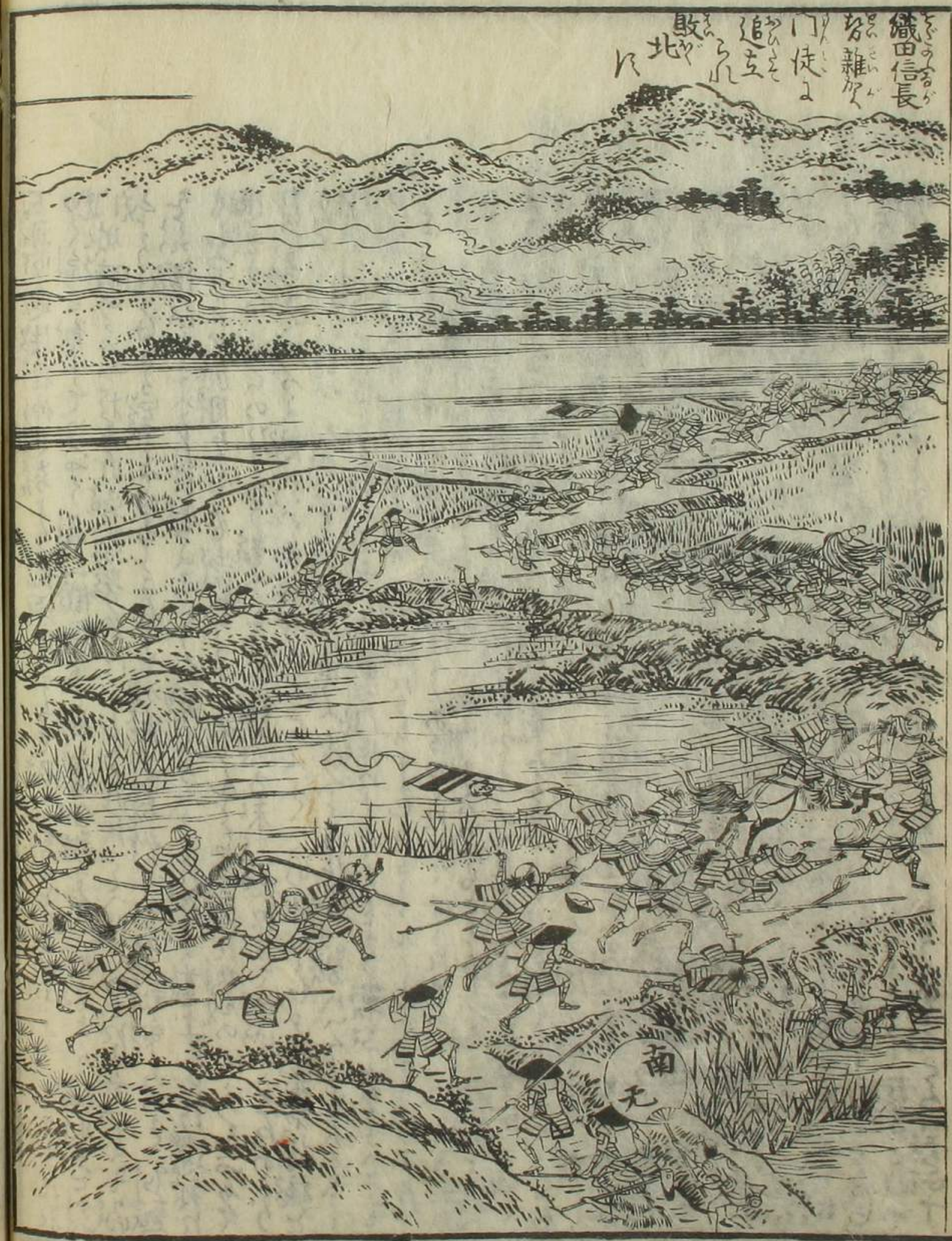
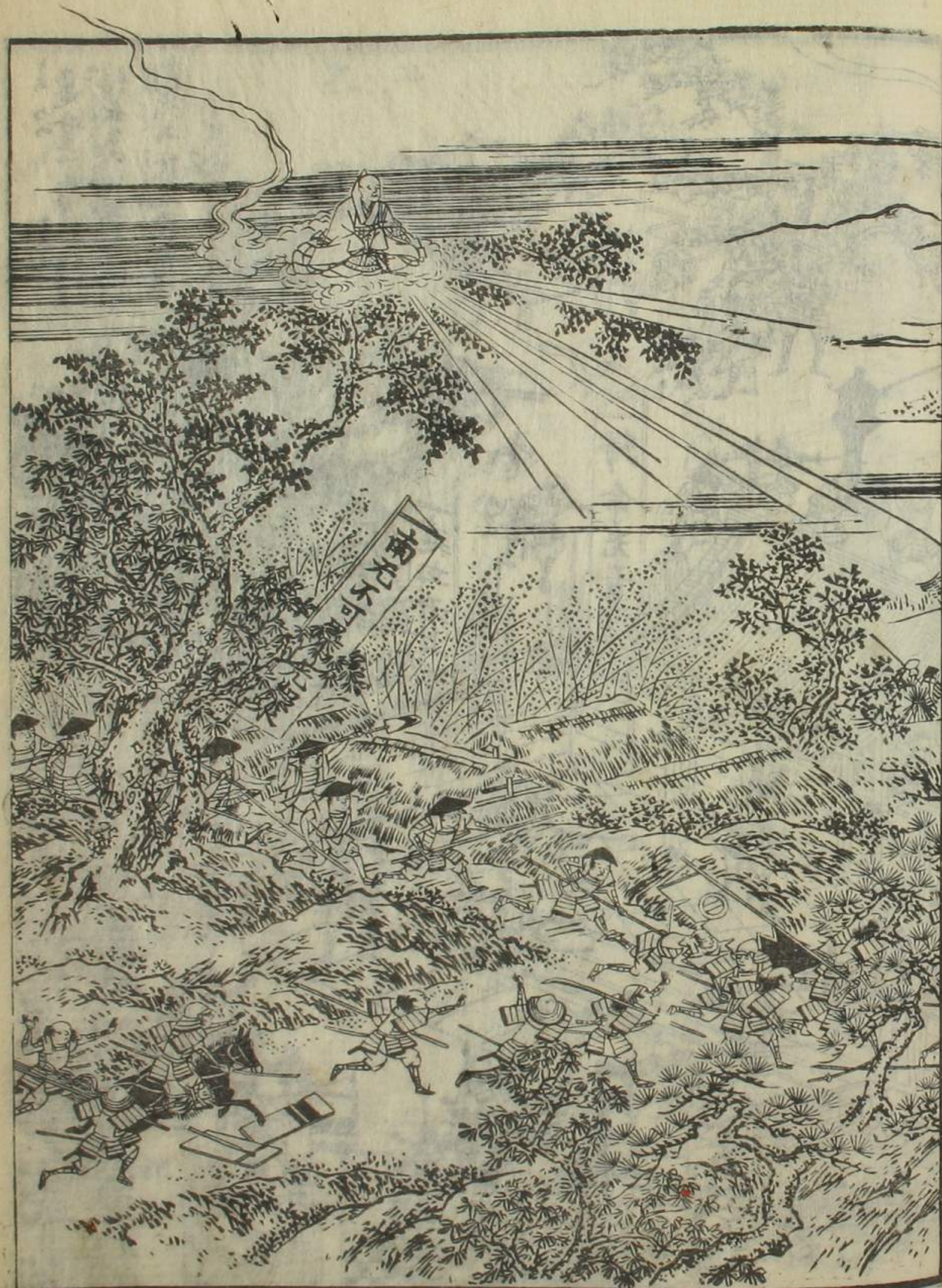


持仏半本を奉る阿弥陀佛

立像七一人五寸上宮を子のけ作の... 持仏半本を奉る阿弥陀佛... 月廿九日... 幾多の事...

下間... 持仏半本... 阿弥陀佛... 持仏半本を奉る阿弥陀佛... 持仏半本を奉る阿弥陀佛...

持仏半本を奉る阿弥陀佛... 持仏半本を奉る阿弥陀佛... 持仏半本を奉る阿弥陀佛... 持仏半本を奉る阿弥陀佛...















よりまや豆とわ〜在田郡の夏も密柑と書く不  
時のころに關らぬものも〜しるべきは〜しるべきは  
知し〜ゆの雪の中は〜しるべきは〜しるべきは  
を食し〜る者を下に〜しるべきは〜しるべきは

紀伊國名所圖會卷之上終



